

---

# ブレイドガンナー～転生少女の冒険譚～(仮)

小鳥遊 輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブレイドガンナー 転生少女の冒険譚（仮）

### 【Zコード】

Z40900

### 【作者名】

小鳥遊 輝

### 【あらすじ】

少女は死に、違う世界で新たな生を受けた。って、意味深な言い方をする必要あるのかな…。まあ、いいか。私は柏葉茉莉です。あ、今はアリアだった。いいかそんなことは。で、私は友達を助けて死んじゃいまして、異世界で新しい命を受けたんですね。まあ、いわゆる“転生”ですね。でも、チートな力とかは全くもらつませんよ？そんな私がその世界の後の歴史に伝説とまで言われる青年と出会い、その青年と共にたくさんの仲間と共に冒険をします。それだけの物語。ほんとにそれだけの物語ですよ？ 題名は変わるか

もじれません。

## 登場人物（前書き）

とりあえずアリアとヴァンの名前をば

Fate風にしてみます。

## 登場人物

アリア（柏葉茉莉）

真名：アリア<sup>アリア</sup>・スカーレット<sup>スカーレット</sup>・レヴァンティア<sup>レヴァンティア</sup>（柏葉茉莉<sup>かじわばまつり</sup>）

種族：<sup>ハーフヒューマン</sup>半人間・父：人間・母：エルフと翼人のハーフ

母親の血を濃く引いている。腰の辺りに翼があるが大きさを自由に変えられる。

年齢：18歳

性別：女

身長・体重：155cm 50kg

属性：秩序・善

ステータス：筋力B+ 耐久C 敏捷B- 魔力A+ 幸運B-

宝具

得意属性：雷・氷・炎・闇

ヴァン

真名：？

種族：？

年齢：20歳

性別：男

身長・体重：175cm 70kg

属性：中立・中庸

ステータス：筋力A 耐久B+ 敏捷B+ 魔力C+ 幸運C+

宝具

得意属性：強化・氷

## 登場人物（後書き）

完全じゃ ないですね…。  
とりあえず順次更新で

## 使用された魔法等（前書き）

劇中で使用された魔法についてです。

〔2011/07/28〕追加しました。

## 使用された魔法等

### ヴォルティクスランス

属性：雷  
威力：弱～中

対人数：1（敵が重なつていたりすると貫く為複数になることも）

解説：雷の槍を精製する魔法。連発性は矢に劣るが、威力は勝る。

### エクスプロジェクション

属性：無し  
威力：元となる魔法による

対人数：10～20

解説：追加呪文。アリアが開発した魔法公式で、使用されている魔法のマナ構成を瓦解させ、マナに属性を持たせたまま弾けさせる技術。威力が使われる魔法にもよるが基本的に魔法を何かの形に固定して放つといった魔法にしか使えない。

ちなみにこれは追加呪文としてのエクスプロジェクションの効果であり、炎の魔法にエクスプロジェクションがあるが、まったくの別物である。

### コキュートス

属性：氷・殲滅  
威力：強  
対人数：大多数

**解説：**殲滅魔法。広範囲に絶対零度をばら撒く魔法。これを受けたものは凍りつき、からうじて免れたものさえ足を地に縫い付けられ行動を制限される。

## フラッシュフルード

属性：水

威力：中

対人数：10～20

**解説：**水の塊を作り出し、鉄砲水のように打ち出す魔法。威力は高いが魔法としての能力は低い。その理由は相手に致命傷を与えるからである。

## サンダーボルト

属性：雷

威力：中

対人数：10～20

**解説：**雷を落とす。威力は高いが屋内での使用ができないため使い勝手は悪い。

## 第〇〇話「やつやから私は死んでしまつよひや」（前書き）

懲りずに投稿です。

この作品はすでにそれなりに書いてありますが投稿はゆっくりするつもりです。

ほかの作品ともどもまく書けるかわかりませんがどうぞよろしくお願いします。

## 第〇〇話「やつやから私は死んでしまつよつや」

はじめにお聞きします。

皆様は転生といつ言葉をござ存知でしょうか？

簡単に言いますと今の自分の記憶等を持つたまま違う人物になり生き返つたりすることなんです。特にネット小説などでは死ぬはずではなく死んでしまい、神様からチートな能力をもらって転生とかよくありますよね。

考えてみると神様とかいるのかという疑問が私にはありますから、もしも死んで転生することになつても私には100%チートな能力は宿らないでしちゃうね。

まあ、でも憧れはあるんですよ。だって、違う世界でかつてよく活躍できるんですよ！最高じゃないですか！ああ、考えるだけで幸せになれるよ～。

おつと、いけないいけない。話がずれましたね。

そんなわけで私にはいろいろあるわけですよ。そんなわけで、まずは始まりの物語を…。

私が死んでしまい、記憶を持ったまま違う世界へと誘われそこで巻き起こす様々な物語を語りたいと思います。

まあ、先ほど申し上げた通り私には特殊な能力の一つか二つえらべなかつたんですがね。

\* \* \* \* \*

私は柏葉茉莉です。今年で17歳の女子高生です。ちなみに一年生です。

身長は160㌢くらいで体重は秘密です。スタイルはぼん！きゅつ！ぼん！とまではいきませんがそれなりにいいですよ。髪は黒髪をポニテにしてあります。生粋の日本人なので髪も田もなんの面白みもない黒ですね、ハイ。

まあ、そんな感じの私ですが今は、学校の授業中です。まあ、成績は常にトップを維持してますし問題はありません。っていうか私にとって今やつてる授業は退屈です。

父が有名な大学の教授として、母はそんな父のようになりなさいと中学までに大学レベルの問題まで余裕で解けるようになりました。

というわけで、授業は聞いてなくてもほとんどわかつていますし、問題をあてられない限り何の問題もありません。

父母ともに放任というわけではないですが大学まで普通に進学さ

せるつもつのようで今は、高校にいるわけです。まあ、私はその方が気楽でいいんですけど。

ふと、気付いたように授業をやっている教師の言葉に耳を傾けるとどうやら自分の好きな三国志の話しているようでその声は弾んでいますね。この教師もこれさえなければいいのにといわれるたぐいの先生なんだよね。もったいない。

先生が「おつと、話がそれてしまつたな」とか言つて授業を再開し少し進めたところでチャイムが鳴つた。

「もつ、終わりか。では、これで終わりにする。当番礼を」

「さつーつ。礼」

『あつがとうございました』

「おお、じゃあな」

わざ言つて先生はフードアウトしてきました。

で、今のチャイムで昼休みに入ったわけで皆様いろいろあるようすで既に教室には半分くらいの人しかいませんね。

私はお弁当を持ちつつ、隣のクラスまで行きます。

ついたところで私は声をあげて目的の人物を呼びました。

「未羅さん。どうですか？」

「はい、今行くから待つててください～」

そう答えていたのでしばらく待つていると、大きな重箱を持った小さな女の子が出てきました。

「お待たせです。茉莉さん」

「ううん。そんなに待つてないから気にしないで。ところが他ののは？」

「みんな先に会つてると思こます」

「そだね。じゃあ行こうか」

私はそのまま、隣にいる小さな女の子と一緒に階段を上り始める。

ああ、この小さな女の子は杉浦未羅ちゃん。たまたま知り合つたおんなじ趣味の子で私の親友。私にはもつたいくらいのとってもいい子なのよ。

階段を登り切り、屋上へ出でるとすでに田舎の人物たちは揃つていた。

「遅いじゃないか、柏葉氏と杉浦氏」

「あなたたちが速いの」

「そういうつって、確かに俺たちが早すぎただよ」

「そつは言つがギルバート氏」

「そうですね。僕としましてはそんなことはいいんで早く」飯を食べたいんですけど」

最初にしゃべったのは柿崎<sup>かきざき</sup>巖太<sup>いわた</sup>。常に頭にバンダナを巻いていて結構クールなお人です。

次に巖太君をいさめたのがギルバート＝レクティファーレ。彼は、留学生ですが母親が日本人で日本語はそれはもう超うまいです。ちなみに父親はアメリカ人で父親に似たみたいでどう見ても外国人です。まあ、国籍は日本ないので外国人なんですが。

最後にしゃべったのが、水鳥涼歌<sup>みどりすずか</sup>。超可愛いです。ちなみに短髪でボーカリストなお方で自分のことを僕っていう僕つ娘です。

ちなみにこれがどんな集まりかといいますと、オタクの集まりなんです。

アニメ研究会という名のオタクの巣窟の住人で同学年で仲がいい集まりなんです。

先にも申しました通り私の親は意外と寛容なんでこんな趣味を受け入れてくれてます。

まあ、そんな人たちで集まって昼を食べてるんですよ。

「で、巖太君は何で未羅をおいて先に行ってるんですか？」

「杉浦氏に言わされたからだな。柏葉氏を待つというので先に行かせてもらつた」

「やつなの？未羅？」

「うん…。だつて茉莉さんと一緒に行きたかったから…」

ああもつ。なんていの子は可愛いのかしい。鼻血でむしゃにやつ。  
出ないけどね。

「わかつたわ。じゃあ食べましょ！」

せうして、みんなでアニメやらの話をしながら飯を食べる。

ちなみに未羅は結構なお嬢様でお弁当はいつも重箱だ。当然食べ  
きれるはずもないが、私たちみんなで食べる」とをわかつて未羅付  
きのメイドさんがこれにしてくれている。

そんなわけでみんなで突つきながら食べる。

食べ終わると、みんなで部室に移動して談笑。その後、何事もな  
かつたように教室に戻った。

教室に戻つて授業を受ける。ちなみに私は1組で未羅と巖太君が  
2組でギルが3組で涼歌が4組。だから、授業中は基本的に一人だ  
し、教室内で私に話しかけてくる人はほとんどいないし、ちょっと  
ばかし寂しい。友達は一応いるけどね…。

そんなこんなで放課後となり、部室に向かつ。

まあ、行つたとしても、不毛な会話をして一日の大半を終える。

たまに、自主制作のアニメを作ったりしてるのでなかなか上手くいかないから最近はあまりやつてない。稀に傑作クラスのものができるたりする」ともあるのだそうだ。けれども、しょせん趣味の範囲ですから期待はしません。

やつぱし、そんなこんなで下校。

未羅と一緒に帰ることの多い私は、今日も未羅と一緒に帰ることとなつた。

ほかの3人は方向が逆なので町に繰り出さない限り下校で一緒にはならない。

連れだつてしまいく歩くと未羅が話しかけてきた。

「ねえ。茉莉ちゃん」

「ん? どうしたの未羅?」

「ううん。やつぱりなんでもない……」

「気になるじやん。言いたいことがあるなら言ひやけってよ

未羅は答へずうとうとしている。私は答えを聞くために顔を近づけた。

「親友でしょ?」

「やうだね……。茉莉ちゃん。今日はなんだかとても嫌な感じがするの……」

「どう」と?

「何かね…。何となくだけど、大切なものを失うよくなそんな感じ…」

「ふうん…。杞憂でしょ」

「やうだといいのだけれど…」

私は未羅を元気づけるために言つた。

「何かを無くしたつて私がそれ以上のものあげるよ。大切な親友の悲しそうな顔なんて見たくないしね」

「ありがと茉莉ちゃん…」

照れたように顔を赤くする未羅。ああもひ。この子はほんとにかわいいなあ。

そうして、一緒にまた歩き出す。

しばらく歩いて行くとわかれ道でそこで私は未羅と別れる。

だけど、今日の別れは何となくだけど惜しく感じていた。だから、少しの間そのわかれ道で話しこんでいた。

しばらく、話をしてネタが尽きた所で

「ん~、じゃ。もう帰るね

「うん。じゃあ茉莉ちゃん。また明日」

「うん。また明日ね未羅」

私は先に帰ると言いながら未羅を見送っていた。

その時、未羅の方に向って大きなトラックが突っ込んできているのが見えた。

「ちょー！」

思わず走ったね。運動音痴な私だけこの距離なら走つと間に合う。

そう思つて突っ込んだんだけど馬鹿だね私。だって運動音痴なんだし。

私は未羅を突き飛ばしてそのまま、こけてしまつた。

しまつたつて思つたよ。でも、もう遅かつた。目の前には大型トラック。

「ごめんね、未羅。また明日つて約束したのに…。

そうして、私の体は吹き飛ばされ、意識を失つた。

\* \* \* \* \*

意識が朦朧とする。おそらく、私は死んだのだろう。だって、あんなスピードで突っ込んでくる大型トラックにはねられたんだよ？死なないわけないって。

ぐわんぐわんとする頭の痛みを抑えつつ私は現状を確かめる。ここが死後の世界ならきっと、私は天国に行けるね。まあ、希望だけど。

まあ、結局私は、どうやら死んでしまったようです。

親友を救つて死んだんです後悔はありません。でも、未羅はきっと自分を責めちゃうだろ?な。まあ、そこはみんなに期待で泣きやませてあげてね。

で、ここはどうなんだろう?

確認をしようとするが手足は動かないし、声も出ない。一体ここ

せどり?

やう思つてゐると、なぜだか急に動かなきや いけない氣がして、動いてみた。

しばらく動いてみると光が見えた。

そして、

「 もうやめへー 」

……。じつやう、私はいわゆる“転生”をしてしまつた模様です。誰か助けて……。

第〇〇話「もしやたら私は死んでしまつよひや」（後書き）

どうだつたでしょ、うか。

感想等ありましたらよろしくお願ひします。

## 第01話「冒険者になりました」（前書き）

「2011/11/09」新章（第03章）に入るに伴い、修正及び、内容の追加を行いました。

## 第01話「冒険者になりました」

この大地、ヴァルテストに生を受けて18年が経つた。

ヴァルテストはいわゆる異世界といつも魔力も魔物もいるような世界だった。びっくりだね。

それで、私こと、柏葉茉莉はめでたいのかはわかりませんが転生して、この地で生きています。

ちなみに、今の名前はアリア＝スカーレット＝レヴァンティア。

どこのでもあるような商家の次女として生を受けた私は、特にすることもなかつたのでやっぱり勉強をしていました。物心なるものは新たな生を受けた時点ですでに持っていたわけですから。

生まれてからしばらくは、家の中の観察、まあ、動けないしね。ちなみに夜泣きなんてしなかつたらうちの子は静かでね、なんて言つていた。

2ヶ月もした頃にはすでに言語を覚えようとしていた。両親の会話や兄や姉の会話を聞きここが私の知っている場所じゃないんだとはわかつていたので、まずは言語と思い覚えようとした。まあ、3ヶ月くらいで言語をほぼマスターしたね。以外とかかつたけどこれでいろいろ覚えられると意気込んだ。

生まれて半年後には立つて見せた。両親は驚いていた。まあ、その時にはしゃべれりと思えばしゃべれたんだけどさすがにやばいと思つてしまふのはやめた。

一歳の誕生日の頃には家族がちょっと出かける間にこいつそりと難しそうな学術書を読みあさった。

三歳になる頃には、この世界のことを理解してどうやって生きていかのかを考えた。家にあつた学術書はほぼすべて読み終わつていだし、やることもないとから外に出ては怒られた。この頃には魔法で身体強化をしていた。この頃の私の体はちょっと弱くてね。

六歳になったころに学校らしき場所に入れられた。正直、めんどくさかつたが両親は私のことをものすごく可愛がってくれていたし、期待にも答えたかったから、ちょっと頑張りすぎた。この頃には、同じ年齢の子たちとは天と地ほどの知能の差ができていた。ちなみに運動はかなりできるようになつた。でも魔法で少し躊躇いた。まあ、すぐに克服したけど。

一一歳。どうやら学校のシステムは地球と同じじらしく六年で初等部が終わった。ちなみに、学校に入ったころ運動も勉強もものものすごくできる神童と呼ばれていた。まいつたね。まあ、最初のころ頑張りすぎたのがいけなかつたね。その後は抑えつつも一一歳までなつた。

さて、一一歳で問題が起きてしまつた。どうやら、完全に学校のシステムは同じではないらしく、そこからさらに六年間、上級の学校に行かなればならなかつた。しかも、その頃には、自分がどのように生きるのかを考えるのが当たり前らしく、入る上級学校にて専門が違うらしかつた。まあ、せっかく、異世界に転生したんだし楽しもつと思つて戦闘形の方へと私は進路を決めた。

それから、六年は必死こいて戦闘訓練をこなした。やっぱり、転生前の記憶が残つていて運動がやっぱり苦手な部分がネックになつ

ちやつた。まあ、一年で克服して学年トップクラスの成績だつたけど。もちろん筆記は満点ね。魔法もね。まあ、覚えられる範囲で覚えたけど。ちなみにこの六年間で授業そっちのけでかなりの魔法の論文を書き上げた。筆記試験は初等部のときにはほとんど勉強し終えたので問題はなかつたよ？

とはいっても、満点とかを取つていたのは最初の数回。実技の方も一回トップになつてからは自重してかなり大人しめにやってたけどね。

で、無事その六年を終えて私は18歳になった。ここでの、また選択だ。両親からは家のためになんたらかんたらとは一切言われてなくてむしろ自由に生きてくれと言われた。方針なのか放任なのかははつきりしないけど。で、私に与えられたのは、『国の騎士団に所属する』か『冒険者になる』かだつた。

もちろん、冒険者になることを選んだね。私にはその方が合つてるしね。何かに縛られるのは嫌いだしね。

つてなわけで今は、卒業式でその後は家でパーティーです。

翌日にはギルドに行つて登録を済ませて冒険者になります。

ああ、明日が楽しみ！

\* \* \* \* \*

翌日。朝起きて、リビングに向かう。

リビングには既に家族が坐って、朝食が並べられて待っていた。

「おはよう」

「おは、おはようアリ亞。よく起れたか？」

「はいおかげさまで」

「アハカ」

話が終わると私は席につき、「飯ができるのを待つ。その間に姉や兄と話をする。

「今日旅立つんだろ？」

「うそ、そのつもり。こつまでもダラダラしてたら迷惑だし」

「そんな迷惑なんてないわよ。あなたは私たちのかわいい妹だし」

「うそ。でも、こつまでもこるといわ」と決心が鈍りながら

「アハカもな」

「でも、いつでも帰ってきていいんだからね」

「そうだぜ、アリア。俺はこの家を継ぐし、姉貴は学校の講師だ。基本的にこの街にいるつもりだよ」

話しているうちにご飯ができたのかすでに並べ終えられていて次に聞こえたのは母の声だった。

「さうよ。あなたは私たちの大変な家族だもの。いつでも帰ってきていいのよ」

そう言われて思わず涙が出た。

「ご飯を食べ終え、部屋に戻り着替える。昨日、卒業記念にと買つてもうつた装備一式だ。結構、かつこいい感じになった。特に黒コートは最高に生えるね私美人だし。

ああ、ちなみに私の身長やスタイルは転生する前とほとんど変わらなかつた。でも、髪は銀色で目は蒼でそれはもうかつこいいのなんのつて。やっぱボーテだけどね。

着替え終わり武器を腰に差す。剣と銃。銃はほとんど護身用。まあ、私としてはもつと他にいい武器があつたらそれにしたんだけどね…。まあ当面の目標も決まつてるし、私の武器探しと人生を行こうかな。

家を出ようと玄関まで行くと妹が待っていた。

「アリアお姉ちゃん。もつ行つちやつの？」

「「めんね…」でも、こゝは私の家だからたまには帰つてくのも

「うん。でも、私お姉ちゃんみたいに冒険者さんになるの」

「そつなの? ならがんばれ」

「うん。」

そう言つて玄関を出る。やつぱりとこつべきか家族全員が待つていた。妹もすぐそこの中に加わる。

『こつへじゅしゃいー。』

みんながいっせいにこづか。だから私も元気良く返した。

「うんー! 行つてきますー!」

今生の別れじゃないけどね。

そんなわけで私は今ギルドの前に来ています。

女冒険者の数は少ないから田立つとのことで男っぽい服装にしたんだけど普通に女ぽかった…。まあ、女なんだけどね。

意を決して入つてみると中にいた人たちが一斉にこづけを向いた。

ビックリとなつたけど、せんぐに会話に戻つて行つた。

受付まで言つて私はいつ言った。

「ギルドへの登録お願いします」

私はいつして冒険者となつた。

でも、このことによつたへの出来事を巻き起しことなつて  
つた。

第01話「冒険者になつました」（後編）

取つまゝ話まで。

## 第02話「出会ったのは不思議な青年だった

「ギルドへの登録お願いします」

「はいわかりました。ではこちらの登録書の記入をお願いします。その際、誓約書の内容をよく読んでおいてください」

「はい」

そういうわけで、今私はギルドの登録に来ています。冒険者として名乗るにはギルドへの登録は必要不可欠です。しかも、発行されるギルドカードなるものは身分証明書にもなるので便利なんですね。はい。

まあ、そんなわけで利用規約等はあらかじめ理解していたからすぐに入部の書類を書いて提出した。

すぐにできる依頼を探そうと思つてそのまま受けで話をす。

「すぐできる初心者向けの依頼つてあります？」

すると受け嬢は困ったように言った。

「あるにはあるのですが、複数人向けのものでして…」

「え？ と、じゃあいい方悪いんだけど今このギルド内にいる人で初心者レベルの人います？」

「いますよ。でも、ちょっと気難しい人見たいですでの無理かも知

れませんよ？」

その人の名前と居場所を聞いて向かおうとしたときなんか、ガタイのいいおっちゃんたちが私に向つて話しかけてきた。

「おい、嬢ちゃん。人手探してんのか？だつたら、手伝つてやるぜ」  
どう見ても、下心のありそうな人たちの誘いを受けるほど私はバカじやありませんよ！

とまあ、そんなこと言へるはずもないのやんわりと拒否をする。

「いえ。自分で探すんでいいですよ。」

「ふざけんなよ。」少しどう親切に話しかけてんだから何も言わず従えばいいんだよ！」

何！？この人はアホな人なの？まあ、いうなつちやうと対処のしようがない。つていうか片手をつかまれりやつてるしどうじょうもない。

さあ、どうしましょうね？これ位の拘束なら抜けられない」ともないけど。いきなり面倒事をおこすのもなあ…。

そう思つてると、一人の青年がおっちゃんの腕をつかみ、

「やめときな。今のお前程度でどうにかなる相手じゃないぜ」

と私に耳打ちしてきた。

「何だ小僧！邪魔すんな！」

「邪魔とは失礼だな。俺はこいつの付き添いをするよつに受付に頼まれたんだぜ？あんたは無理やり俺からその役奪うわけ？ギルドの斡旋の邪魔は結構なあれだよな？」

そう青年が呟つと、

「つちーお前、りこべやー。」

と言つて、おつかやんたちが消えていった。

ああ、助かつた。

「ありがと」

「いや、別に…。とにかくお前がアリアか？」

「そつだけど」

「俺はヴァン＝アルテミニアだ。言つたとおり、受付に頼まれてお前の付き添いを頼まれたのだが…断つていいか？」

「ええーいいじゃん一緒にやるつよー」

受付嬢サンクス！と思いつつ誘いをかける。

「苦手なんだよなそういうのは…。いつも一人で依頼を受けている上に俺は弱い。だから、役に立てんはずなんだ」

「むしろそんな人がいいなと思うよ？だって、弱いつていうのは一緒に強くなれるし、苦手を克服できるかもしれないよ？」

「いや、しかしだね……」

そんな感じで押し問答を続けて10分後……。

「ああもう一分かつたわかったー俺の負けだ。一緒に依頼を受けてやるし、しばらく一緒に冒険もしてやるー！」

幸先いいね！私は、こんなすぐに仲間を手に入れられるなんて。

「うふ、よろしくね。ヴァン」

「ああ、分かつたよ。よろしく頼む」

「」のヴァンといつ青年は20歳でおとし旅に出て「」まで来た  
そうだ。容姿は結構かっこいいめで黒い服が好きらしく装備は黒が  
多かった。

ちなみにギルドランクは「」です。私は、入ったばかりでE  
ランク。

でも、一つ気になつたんだよね。ヴァンはなんか筋肉の付き方と  
かが普通と違つた。まあ、眼力鍛えてるからわかつたけど、なんか  
普通に強そうだった。

まあ、でも不躾に聞くのもあれだと思つて、聞くのをやめた。

まあ、一緒に行つてくれる人も見つかったし、受付に行くか。

「依頼お願ひいね。後、さつきはありがと」

「どういたしまして。よく了解とれましたね」

「まあね」

「いいから、早くしてくれないか?」

ヴァンにせかされた。

「わかったわよ」

「では、ゴブリンとそのリーダー、ゴブリンチャップの討伐依頼です。場所はここから2バルアほど先の村です。

近くの畑を集団で荒らしているそうでその討伐です。ゴブリン自体は一般の初心者より弱いくらいですがゴブリンチャップの統率によりなかなか手ごわくなっていますので気を付けてください。

それでは、お願ひします」

そうして、私たちは街を出て村に向かった。

街道を外れない限り魔物とかは出でこないらしい。

ゆつくつと目的地に向かいつつ、ヴァンと話す。

いろんな話を聞こうと思つたのだがそこまで情報は得られなかつた。残念。

まあ、私の中ではこの青年は不思議であるといつ結論に至りましたね。

そんなわけで、村に着く前には話すこともなくなり無言で一人して歩く。

しばらく、すると村が見えてきた。

よおし、私の人生で初めての依頼がんばるぞ！

第02話「出会ったのは不思議な青年だった」（後書き）

連続投稿。

まあ、次くらいで一回打ち止めですが・・・

第〇三話「ヴァンセー。実力隠しきりじゃありませんか?」（前書き）

戦闘描写が入っていますが微妙です。

次回以降の戦闘描写に期待してください。

### 第〇三話「ヴァンさん、実力隠しきりじゃありませんか?」

さあ、そんなわけで依頼のあつた村に着きました。

まあ、「こういう依頼主は基本的に村長とかが出出す」ことが多いし村長の家を探そうと思つていたら村の入り口に自警団らしき人がいて、声をかけられた。

「君たちが依頼を受けてくれた人たちか?」

「ああ、そうだ」

「わかった。じゃあ、ついてきてくれ

そうして、連れてかれたのはやっぱり村長の家だった。ありきた  
りだねえ。

客間に通され、数分待つていると村長らしき人物が出てきた。

「遠いところから苦労様だ。私がこの村の村長レヴァルスだ」

「ヴァン=アルテミアだ。こつちはアリア=スカーレット=レヴァンティア」

「よろしくです」

「つむ。それでは、依頼の話をしようか  
依頼の内容は『ブリンチャップとブリン集団の討伐だ』

「うん。ギルドで聞いたとおりだね。じゃあ、こいつらにかいなかを聞いてみようかな。」

「こいつらから村を荒らされたのがいつになつたんですか?」

「村じやなくて外の畠だ」

「やつだつた。でありますね、こいつからなんですか?」

「……一ヶ月くらしからだな。本来ならもうひと晩く来てくれるものだと思つていたんだが……」

まあ、簡単な依頼だしランクが低い人じやないことをやつ受けないかもな。

「とつあえず、来ててくれて感謝する」

「いえいえ。で、ゴブリンたけまじのへりこの時間帯に現れるんですか?」

「夕方から夜だな。ゴブリンは普通町に行動する」とが多からおかしな話なんだがな

ふう。

「わかりました。今日は来ますかね?」

「ほほ毎日来てるから来るとせ思つよ。いつ、食料が無くなるかひやひやしてゐよ」

「はい。じゃあ、今回はゴブリンたちを放置して帰つていく道を行、巣を明日あたりに破壊すること decidido でしょ？」

「被害はない方がいいだろ。ただでさえかなり荒らされてるんだ」

「どうは思つけどね、追い払つた上に追いかけてまともに巣に戻ると思つ?だから、これが最善だと思つんだけど」

そうするビヴァンはまさかのことを言つ出した。

「なら俺が追い返す。お前は奴らを追つてくれ

「はい?」

「どう」と?

「一人いるんだ。仕事を分けてもいいだろ。どうせ討伐を明日に回すなら一人して追いかける必要もない。なら、一人がゴブリンを追い返して、一人が追い返したゴブリンの尾行だ

つまり何? 私に奴らを追えってこと?

「ああ」

無理無理! 私にはスニーキングのスキルないって!

「覚えるチャンスだろ。あいにくゴブリンたちは頭が悪い。下手な尾行でも気づかんや」

やる前から下手扱いしなくても…。

「自分で言つたんだろ。スニーキングのスキルないつて。じゃあ、いいな？」

「わかりました！ もう！」

方針は決まつたけど、夕方までまだ時間がたつぱりとある。

ちなみにこの世界の時間は元いた世界と結構違う。

一日は28時間で一ヶ月は35日。一年は15か月ある。いやあ、人って環境が違つてもそういうものに対応した進化をするんだね。

今は、ちょうど毎時だし、村長に言つて泊まる宿を探すことになった。

ついでに飯も食べようつと。

宿を取つて、フロアで食事をもらひ。

部屋だけでもちろん別々。ほんとは安く済ませたかつたから一部屋にしようとしたんだけど、ヴァンが嫌がつて結局一部屋取つた。

「ところで、お前は何で冒険者になつたんだ？」

食べているところでヴァンが質問してきた。

「もぐもぐ、ゴックン。ん~。人生探しかなあ。学者でもよかつたんだけど、どうせなら世界を見てみたかつたつてことで冒険者になつたかな。後は自分用の武器の作成もね

「そうか。ん？武器？」

「うん。自分で作りついで思つてね」

「ふうん。そうなのか」

「ヴァンは～？」

「ん？俺か？どうでもいいだろ、そんなこと」

「私には言わせておいて自分は言わないの？卑怯じや～ん」

拗ねたように声を出してみると、でもヴァンは冷静だった。

「やうかもな。でも、まあ。機会があったら話してやる。正直言ってくないんだよ」

その顔は結構真剣だった。まあ、無理聞いても仕方ないし本人もいざれ語ってくれるそ�だし、まあいつか。

「まあ、軍に入りたくなかつたつてのが一番の理由だな。何で入りたくなかつたのかまでは言わんが」

なんど、語ってくれました。

「いいの語りあわつて？」

「話の核心は語っていないから簡単にしておひつて冒険者をやつてる理由だけだ」

「わかつたよ」

そこで、食事も会話も終了した。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

部屋に戻つて一息つく。ギルドであつてからなんだか調子を狂わせられまくつてるな。

「集中しろ。集中しろ、俺」

落ち着いてきた。とりあえず、整理しようか。

ギルドで受け付けに頼まれて探して見つけた瞬間、何か気になつた。とりあえず助けてから断るうと思つて話したら、どうしてと言われた。

そのまま、なぜか断れなくなつた。なんだろうな。

だけど、悪い気はしない。久しぶりだがこんなのもいいかもなと

も思ひ。

まつたぐ。

とつあえず今は、ゴブリン討伐を考えようか。

そのあとで、あいつのことを考へよ。

なんとなくだが。あいつ、アリアと一緒に冒険がしたいこと思つて  
いる。

全く、なんなんだいつたい。

\* \* \* \* \*

翌日。昨日の夕方、計画通りにヴァンはゴブリンを追い払った。  
だから、私も言われていた通りにゴブリンをスーキングしてみ  
た。

そしたらなんとこのゴブリンたちひちゃ大きな巣を作っていた。

巣にいたゴブリンも含めると、ゼット一人の匹は超えてるかもしない。

帰つてからヴァンと一人で作戦を練つた。正直なところちょっと大きめの魔法を放てば30くらいなら一気に片付く。でも、そしたら、森の中だつたし最悪火事になるかもしれない。だから、村長さんと話をして、自警団の人たちに巣のまわりに張つてもらうことになった。私たちが突つ込んで削れる分だけ削つて逃げ出そうとしたやつを自警団の人々が各個撃破していくこととなつた。

そんなわけで、今、私とヴァンはゴブリンの巣の近くにいます。すでに巣の周りには自警団の人たちがいて、私たちが巣に特攻をかけるのを待つている。

「いけるか、アリア？」

「もちろん…いつでもいいよ…」

「元気だな。じゃあ、いくぞ…」

そう言つてゴブリン達の巣に突つ込む。

ゴブリン達は私たち闖入者の姿を見つけるや否や突つ込んできた。それでも何匹かで他のはまるで何かに報告でもいくかのように消えていった。

まあ、奴らは後でもいい。とりあえず少しつかに突つ込んできているゴブリン達を切りつける。

しばらく、戦つていると近くで戦つっていたヴァンが声をかけてき

た。

「落ち着いてるな。初めて、魔物とはいえ生き物殺したんだろ?」

ええ、まあ。

「そんなことはないよ。内心びくびくしてるよ。でも、困ってる人たちのためになるならできる」

「そうか、がんばれ」

そういううちに向かつてきましたゴブリン達は片付けた。武装もほとんどしていなかつたので簡単に勝てた。

でも、休んでいる暇もなく奴らは現れた。

「ねえ、ヴァン。あれ何の冗談?」

「さあな、でも異常事態ってことはいくらなんでもわかる」

現れたのは完全な隊列をなしてくるゴブリン達だった。まるで、どこの軍のように整列していた。

動かないでの様子を見続けると、大きな影が現れた。

「レッドオーガ  
赤鬼だと…！」

レッドオーガ。ゴブリンの進化種であるオーガの亞種。火を自在に操り危険。知能は人間ほどでもないけど、力もすごい。

「あいつがリーダーね。まとめれるほどどの知能をもつたオーガって珍しいかもね」

「のんきに言つてんな。あいつどうする?」

「殺すよ。もともとそのつもりだし。ほんとはできるでしょ、ヴァン」

もうこいつビヴァンは殴打せした。

「つか! わかったよ! やればいいんだろ!」

「素直でよひし!」

レッドオーガはしびれを切らしたのか大きく叫んだ。

すると、隊列を組んだゴブリン達が突っ込んできた。

「お前も本氣出せよ!」

「私のできぬかぎりはね!」

「ここまでたくさんいたらとてもじゃないがまともに戦つてられない。だから私は魔法を使った。」

「貫く雷光よ、今、我的手に力をなせ! ヴォルテクスランス!」

出できたのは槍の形をした雷。それを向かつてくるゴブリン達に向かつて投げつける。

放たれた雷の槍はゴブリン達を貫き隊列の真ん中ほどに達する。そこで、追加の呪文を言い放つ。

「弾けるー・Hクスプロジェジョンー・」

瞬間、雷が落ちたかのよつまわりに光が満ちた。思わず田をつむる。

田を開くと自分に向かって走っていたゴブリン達が一掃されていた。

「ふう。まさか20ー!」

数えた感じ約20体。昨日見た感じの100匹ほどならあと80異常は残っているはず。あたりを見回してヴァンの姿を見つける。だが、そこにはあり得ない光景が写っていた。

すでに50以上ものゴブリン達の死体が転がっていたのである。

私が槍を投げて弾けさせるまで約40秒。いくらなんでも早すぎませんヴァンさん。

見てくるとヴァンはさりに死体を量産し続ける。

「おいー見てるなら手伝え!」

ヴァンがこっちが動いていないのを見て声をかけてくる。

言われてから私はすぐに動く。向かってきていたゴブリン達10匹ほどを剣で倒す。いくら統率それでもゴブリンはゴブリン。弱かった。

倒し終わって田をやると、すでにヴァンはレッドオーガと戦闘していた。しかも、レッドオーガを圧倒している。実力を隠してるとは思っていたけどこれは隠しきれない？ギルドランクB～Aはあるんじゃない？

戦闘を見ていると、ヴァンの動きはすばしなやかだった。

レッドオーガが振り下ろす棍棒をぎりぎりの距離で避け腕を切る。口から吐き出す炎を避け足を切る。倒れた所に飛び乗り剣を田に突き刺す。

そんな、行動を流れるよつこやつていう。昔ならこぞ知らず、今の私だってあんな動きをするのは無理だ。

そう思つてこぬうちに戦闘は終わった。レッドオーガは倒され、ヴァンは怪我ひとつなく立つている。

とうえず、一言。

ヴァンさん。実力隠しきりじゃありませんか？

第〇三話「ヴァンセー。実力隠しあるじやあつませんか?」（後書き）

これにて連続投稿を終了します。

誤字など誤りありましたら、連絡ください。

感想も待っております。

## 第04話「ギルドへの報告がつきます?」

戦闘も終わって魔物を倒したことを証明するための部位をはぎ取つていく。村人たちも手伝ってくれているのでそんなに時間がかかるに終わると思う。まあ、そんなわけで村に戻つたらきっと話す時間が長く取れないかなつて思つてヴァンに話しかけた。

「ねえヴァン。あなたの実力、軽くB～Aは行つてるよね?…ビリして、実力隠してるの?」

答えを聞けるとは思つてない。でも聞いておかないとたぶん誤魔化しもできなくなるはずだから聞いた。

「答えたくはない。だが、お前はビリしても聞かなきゃと思つてるのでか?」

そう聞き返された。もううんこいつ答えた。

「うん。だつてこれからも一緒に冒険したいと思つてるもの。それに、解答次第ではギルドへの報告を誤魔化さなきゃいけないし、その場合は村人にも根回ししないといけないしね」

「わかつたよ。だが、全部は答えたくないな。

まあ、簡単に言つと、前にも話した通り軍に入りたくなかつたら冒険者をやつてるんだ。だけど、もともと軍に入れるためにずっと鍛えられてきていたわけだ。だから、あの程度の敵なら何とかなる

「ふうん。で、どうしたいの?誤魔化すなら根回しするけど」

「いや、いいわ。田立ちたくないからランクを上げてないだけだ。  
お前と一緒に旅をすることになるなら上げていく必要も出てくるだ  
ろ？お前的にはランクを上げていきたいんだろ？」

「まあね。私が田舎している場所にはランク制限の場所とかもある  
しがんばんなきゃね」

「そうか」

それで会話は終わった。でも、ギルドの報告めんどくさいんだろう  
うな。

レッドオーガ  
赤鬼は討伐ランクC～Bのいわゆる中堅クラスの魔物だ。だから  
こそ、冒険を始めたばかりのEランクと一年でDランクまでしか上  
げていない冒険者がレッドオーガを倒したとなればきっと面倒くさ  
いことになるんだろうな。

\* \* \* \* \*

自分でも意外なことを言つたものだ。最初はあれだけ嫌がつておいていまさらなんでこう言つてるのか自分でも不思議だが、このアリアという少女と一緒にいればきっと俺は俺でいられると思つた。俺は、『あの人』の息子として見られなくて済む。そういう思いもある。

アリアはどんな奴なのかはわからない。でも、見せてくれた笑顔は全部が良かつた。

まあ、俺の持つてる『アレ』を使うこともほとんどないだらうからな。あいつと一緒に旅をするのも悪くない。

とりあえず今、俺達はもう一町村に留まってからギルドに向かうことになった。なので今日のところは村長の家に泊まることになっている。

で、夜には祝勝会が行われ、それも終わり俺達はあてがわれた部屋へと戻つていた。

今日の戦闘のことを思い出す。

数がいたから本氣で戦つた。ある程度洗練されてはいたが所詮はゴブリンだったから問題ない。問題はレッドオーガだ。あれは本来、こんなところに生息する奴らじやないし、何よりあいつらはゴブリンの進化種だから基本的には頭が悪い。なのに奴はゴブリン達を鍛えまとめていた。つまり、レッドオーガにかなりの知能があった。おかしいどころではないが、戦闘自体は通常のレッドオーガと何ら変わりなかった。つまり、集団戦闘についての知識のみを詰め込ま

れていった。

「何者かが魔物に知能を『与えてる』？」

だが、何の目的で？

一応過去にも魔物に知識を『与えていたものがいたのも確かにある。だが、その人物はすでに捕まつて処刑されたはずだ。魔物に知識を与える技術も帝国が既に回収して誰の手にも触れられないようにしてあるはずだ。』

何者かが暗躍しているのかもしれない…。

「まあ、俺にできることなんてたかが知れてるしできぬことはほとんどのんだろうがな」

考えてわかるのはここまでだ。所詮、俺たちにできる限りなんてない。あくまで考へることしかできないこの考へが正しいとも言えない。

「これを、ギルドに報告するのはやめておこう。わからない情報をして混乱させても仕方ないしな」

そう考へ、思考を終える。

「この考へが当たるなんてことがないことを祈りたいが絶対はあり得ない。もし、この考へが当たつっていたとしても俺達が巻き込まれるようなことじやないだろ。」

そう思つてみると、ドアをノックする音が聞こえた。

\* \* \* \* \*

ヴァンが今日の戦闘への考察をし始めたのと同じようにアリアも同じように戦闘を思い返していた。

「うん。やっぱ、何かおかしいんだよね。いくら『ブリコン』に知能がついてもあそこまで隊列を組んでなおかつ連携をとれるほどの知識を持つことなんてほんとありえないはずなんだよね。

やっぱあのレッドオーガ？でも、レッドオーガも一応は『ブリコン』の進化種だし、知能自体は『ゴブリン』より上とはいえ基本的に本能のまま戦うタイプだから、あそこまでの連携を整えられるはずはないんだよね…。

やっぱ、何があるのかな？でも、ハッキリ言って何なのかはわからぬし私にできることがあるとは思えないしね。

ヴァンのほうも何か考てるかもしれないし、これが異常ならギルドへ報告するべきかも相談したいしね。

そんなわけでヴァンの部屋の前まで来ました。なんかね、入り辛いだよね。私だってちゃんとした青春真っ盛りの女の子だよ。この世界の換算だと分らないけど、恥ずかしいんだよね。

まあ、恥ずかしがつても仕方ないからノックしよ。

「ン」

「誰だ」

「アリアだよ」

「わかつた。入つていいぞ」

入りま～す。

入った部屋は簡素な部屋だつた。つてまあ当たり前だよね。借りてる部屋なんだし。

「で、何の用だ？」

「んとね、倒した奴らだけどねちょっとおかしくなかつた?」

「おかしいってのは?」

「なんか統率取れすぎな気がしてね。いくらなんでもレッドオーガ

でもそこまでの知能はないはずなんだよね

「そうだな。俺もそう思っていたとこだ。あれが異常事態なのはわかつてはいるが原因が分らない」

「やう。心当たりはあるんだよね？その言い方だと」

私はヴァンが言った時の微妙なニュアンスからなんとなぐそういう聞いた。

「まあ、あるにはあるんだが…。最悪のケースだとこの大陸で大規模な戦争が起ころかねないくらいやばいかもしれん…」

絶句したね。まさかそんな事態まで起きかねないなんて。

その後、どういうことなのかを聞いた。

まとめるとい、

何十年前にグランディール帝国で魔物を操つて帝国を乗っ取ろうとした魔導師がいて、その時に使用されていたのが魔物に知識を与えた上に洗脳して使役するというものだったそうな。

その魔導師はグランディール帝国とファイアナ王国の連合軍によって行われた魔物の全滅によって無防備になつたところを捕らえられ、死刑になつたみたい。でも、その魔導師の記した魔物に知識を与える外法は残つた。今は、帝国が禁呪書庫で厳重に管理しているらしい。

最悪のケースとはつまるところ、帝国がその外法を使い魔物を使

役。そして、他の国を侵略しようとした場合のことだつた。

「それマジやばこじやんー」

「そう言つてゐるだろ、最初から…。だから、この件はギルドには報告しない。一応レッドオーラガいたことを報告するだけだ。まあ、村人には最初から魔物の異常な行動については言つてないから問題ないしな」

そう言って締めくくつた。

最悪のケースにならければいいけど…。

そのあと、部屋に戻つて寝た。意外と良い眠りでした。

次の日、昼過ぎに村を後にした。

村長に依頼完了の紙をもらひ、ギルドに行く。2バルアの距離は意外と長いからいろいろ話しながら歩く。

ちなみに、普段歩く街道に魔物が出ることはほとんどない。整備された道であり魔物も好き好んで食料の多い森などから出てきて襲うことも多い。村などへの襲撃はそういうのとは違ひ食料の豊富な村を襲う方が魔物にとつても楽であるのは確かだ。だから、昨日みたいな討伐の依頼はたくさんある。

まあ、雑務系の依頼が一番多いことにはかわりはないけど。

そういひしだるうちに街に着く。ちなみに私が住んでいた街。商

商業都市ラインルート。商業で栄える街である。

ギルドに行き、報告をする。と言つても、報告するのは事前に話し合っていたことだけで、知能を持つてこよつた行動をとつていたことは報告しない。今後もあるようならば報告の必要もあるとは思つ。だけど、混乱を招いても仕方がないからといつことで報告はしないことにした。

この日、私たちは、この街で宿をとつた。

明日は元氣を出て、鉱山都市グレイバンに行こうかな…。

## 第04話「ギルドへの報告がしきまか？」（後書き）

これにて一章です。短くてすこません。

次章はそれなりに長くなるつもりです。

次の投稿はちょっと時間を置きますが、長くても一週間から一週間で投稿できたらと思います。

感想等をお待ちしております。

〔2011/11/10〕國の名前がいろいろと間違っていたのを  
いこと思つた所で元々合わせました。

第〇〇話「私はまた会いたいから……」（前書き）

新章です。

## 第〇〇話「私はまた会いたいから…」

茉莉が死んで早一年近くたつた。あの冬の日の悲劇はいまだに忘れない。あの日から私は自分の不甲斐無さを忘れない。

私の家の事情に巻き込んでしまった茉莉。私を守つて死んでしまつた。

狙われることはいままで多くあった。何での時反応出来なかつたのかはわからない。

だから、あの時からずっと鍛えてきた。もう一度とあんなことにならないために…。私にできるはずのことをやるために…。

それにまだ会えるはずだから…。

私はまた会いたい…。だから…

\* \* \* \* \*

「じめんね。こんな時期に呼び出して」

私は放課後、仲間たちを屋上に呼んだ。受験が迫るこの時期に私は話すことがあると呼びつけた。

迷惑極まりないことは承知してる。でも、伝えておかなくちゃ きっと困る。

「杉浦氏よ。別に我々は気にしておらんよ」

「そりだぜ？ 何か大切な話があるんだろう？」

「うん。今から話すことはかなり大変なことなの。事によっては受験を諦めてもらうことになるかもだから。まあ、皆の意思次第だけどね」

「そりなの？ まあ、話してみてくれると助かるかな」

私は涼歌の言葉を受けて私は話し出す。

「もし、また茉莉に会えるなら会いたいから？」

私が言った言葉に皆が固まる。まあ、無理もないか。死んだ人間に会えるわけがない。普通ならそりだよね。

「そりだぞ、杉浦氏？」

「説明が長くなっちゃうから、この話は私の家でやりたいんだけどいいかな?」

やつして、柿崎巖太・ギルバート＝レクティファーレ・水鳥涼歌の三人は杉浦未羅の実家へと招かれた。

「「「なんじゃ」」」

三人の声が重なつて聞こえた。まあ、連れてきたのは豪邸だったし。これが家ですなんて言われたらそりや驚くよね。

来るときに乗つてもらつたのは黒塗りのリムジン。皆にはお金持と言つてあつたけど、ここまで裕福だとは思つてなかつたのかな?

皆を私の部屋に連れていぐ。

「入つて」

私が先に入り、皆を呼び入れる。

皆が部屋に入ったところで扉の鍵を閉める。

「何故、鍵を閉めるのだ?」

「ここで働いてる使用人にも話を聞かれたら困るからかな。私の家が何をやつてるのかは知らないからね」

皆をソファに座るように。全員が座つたところで再び聞く。

「じゃあ、最初に聞くね？もし、また茉莉に会えるなら会いたいから  
しあわせ」

「それは、気持ちとしてかな、杉浦氏？」

「そうだよ。会える会えないに関係なく、あなた達が茉莉に会った  
こと思つているかを聞いてるの」

「ふむ、さうか。それならば、私はもちろん会いたいと思って  
いるぞ。柏葉氏は同士であり仲間であるからな」

「俺もそう思つてるよ」

「僕もそう思つてる。会えるのなら会いたいもん」

私はその言葉を聞いて私は安心した。思つていないと言われるの  
が正直怖かったのは確かだ。

でも、大丈夫だ。だから、私はみんなに言った。

「茉莉はね、異世界で生きてるよ。違う人間として生まれてるけど  
ね」

その言葉にみんなが絶句した。でも、これでようやくスタートマーク  
インに立てた。

待つてね茉莉絶対会いに行くから。

## 第0-1話「私の夢は…」

以前にもお話ししただろうか。

私は、親友を守つて死んだ。そしてこんな世界に転生した。

そのことに不満なんて一切ない。あるのは、親友への思いだけ。助けられたのかはわからないけど助けられたのなら良かつたな。

まあ、そつならしい程度だけね。

会えるのならば会いたい。そう思つ。でも、私にできるひとなんかほとんどない。この世界の魔法に異世界への扉を開けることでのきる魔法はない。完全にないとは言えないけど有名な学術書は読み漁つた。でも、そんな魔法はなかつた。だから、ないんだとそう思う。それに、もしあつたとしても未羅達はもう30歳を超えてるはずだ。だから、あつてもわからないんだと思うつ。

だから私はこの世界で生きていく覚悟を決めている。だからこそ、私は夢がある。この世界で生きていくために夢を持った。

わう、私の夢は…。

\* \* \* \* \*

「グレイバンに行こうと思つんだけどどうかな？」

私は、朝食をとっている最中にヴァンに提案していた。

「いいが、どうして鉱山都市なんだ？世界を見て回りたいんだろ？」

「うん、やうなんだけどね…。もう一つの目的を先にやるつかなって思つてね」

「いいぞ。俺は目的もつて旅してるわけでもないしな。しばらくは一緒に旅もするぞ」

よかつた。断れなくて…。

「で、何が目的なんだ？」

「言わなきゃだめ？」

正直、人に言つのはちょっと恥ずかしいんだよね。

「別にいいんだが聞かせてほしいかな」

「――」

まさか、聞かせてほしになんて言われるとは思ってなかつた。思わず、顔が赤くなつちゃつたよ。

落ち着け～、落ち着け～私。

ふう。落ち着いてきた。よし。

「え、ええっとね。私の夢の一つが、自分の武器を自分で作ることなの。でね、その為の材料を集めたいんだけど、そのための一回行っておきたいかなつて。行つたからつて全部やれはしないんだけどね。たはは」

「えへん。うまくしゃべれないよ。

なんでだる。心なしかヴァンの顔も赤くなつてゐるよう見える。まあ、私はものすごく赤くなつてゐるしね……」

はずい、マジではずいよ。

「ま、まあ、目的があるならひつひつか。鉱山都市行きの依頼がないか見てくるわ」

そう言ってヴァンは席をたつて行っちゃつた。

「うん。まだ、顔が赤いよ。なんでだる。ヴァンといふとひつひとキドキするんだよね。

\* \* \* \* \*

何なんだよ。あいつは。めちゃくちゃ可愛いじゃねえか。

って俺は何を考えてんだ！落ち着け！。

ふう。なんだろうな、全く。

アリアといふと調子が狂わせられるぜ、まったく。

とりあえずギルドに行くか。ちなみに今の俺のランクはCでアリアはDだ。レッドオーガを一人で倒したんだから当然か。

ギルドにつき依頼書の張り付けてある掲示板を見る。

その中に護衛の依頼があり、ちょうど鉱山都市に向かう商人が出しているみたいだ。

よし、これでいいか。

俺はその依頼書を取り、受付に持つて行った。

\* \* \* \* \*

暫くたつ頃には私も平常心を取り戻した。なんであんなに緊張しあんだる。謎ですね。

宿屋でヴァンを待つ。グレイバン行きの護衛があるといいな。  
とりあえず、グレイバンについてまとめとこうかな。

### 鉱山都市グレイバン

文字どおりに多くの鉱石が掘り起しそれる鉱山がたくさんある都市で鍛冶などもかなり盛んだね。

住んでいるのは主にドワーフが多くてその次に人間かな。

この都市で作られる武器は量産された铸造の物から鍛冶師が丹精込めて打ち上げた一品ものまで幅広くある。

こんな感じかな。後は武器についてかな。この世界に来て私が一番びっくりしたんだもの。

IJの世界 ヴァルテスト には通常の武器とは違つ武器が存在する。

ただの武器はそれこそ使い古されていくようなものだけど、この世界の武器にはそれより上の武器が存在する。進化する武器、通称リアファーレ。

文字通りに進化していく武器であり使用者に合わせた武器に進化していく武器である。

ただし、武器の形状と持つ属性は変えられないが、一度使えば一生使える武器なのである。

まあ、マスター登録が必要で、一度でも進化をした武器はほかの人があなたと使えなくなるから問題なんだけどね。

ちなみに普段から武器の大きさのままのものもあれば、小さなアクセサリー程度の大きさにできるものもある。

値段はどちらも半端じやないほど高くて貴族とか大商人の子供とかくらいいしかもってない。

作るのにも資格が必要で国家試験をクリアしなければならない。筆記と実技があつて、この試験に通るのは年間で一人か二人だそうだ。

この武器を作るのに使われているのは古代文明の遺産である技術。だから、作り方は分かつてもどういう理論でできているのかまでは分かつてないそうな。

なもんで、筆記試験は作る工程を聞くだけ、実技はレプリカモールの作成。まあ、その手順も異常なまでに難しいんだけどね。

まあ、武器はこんな感じだね。鍛冶師の免許は一種類あつて普通の武器とリアファーレ。これ持つてないと商売できないんだよ？

ちなみに私はどっちも持つてるよ。最年少で取得したらしいけど、

騒がないでほしかったから頼んで隠ぺいしてもらつた。いやあ、騒がれるのは得意じゃないんですよ。

もちろん作りつと思つてるのはリアファーレだよ？

そんなこんなで、しばらくたつとガトランが返つてきた。

「これでいいか？ つつかこれを頼んできた。もちろん俺とおまえの名義でな」

渡された依頼書を読む。

ええ何々。

依頼：鉱山都市グレイバンまでの護衛

人数：5名

内容：鉱山都市グレイバンまでの護衛を頼みたい。道中の衣食住はこひらで持つ。

報酬：銀貨4枚

依頼主：ゴルテア＝ルブルス＝レヴァンティア

ん？ ゴルテア＝ルブルス＝レヴァンティア？

「つて！ これ父さんの依頼じゃん！」

「は？おまえ、ゴルテアさんの娘か！？」

「そうだけど、なんでヴァンが驚いてんの？」

「ゴルテア＝ルブルス＝レヴァンティアさんはフィアナ王国の中でも王族に認められるほどの大商人だぞ！なんで、その娘が冒険者なんてやってるんだ！」

「ええ！？ そんなの！？ 全く知らなかつた…。だつてうちは多少は裕福に暮らしてたけど結構質素だつたもん。

「まあ、そうだな…。そういうことも認められて、あの人は国認定の商人をやつてるんだろ…。部下もいるはずなのに自分で行くものすごいな…」

「『売る品物は自分の田で確かめて売る。買つてもらう人に粗悪品を渡さないようにな。雇う奴も俺が決める。楽しい買い物をしてもらつためにな』が信条だよ。絶対に自分が納得しないものは売らないんだって」

「そうか。で、これでいいか？」

親と行くのは恥ずかしいけど、楽に行けるしいいか。

「うん、いいよ」

こうして私たちは鉱山都市に向けての準備を始めたことになった。出発は一日後でその時にほかの冒険者とも顔合わせをするらしい。

出発の前に家に顔を出しちゃうかな？

## 第01話「私の夢は…」（後書き）

まともに戦闘しません。  
その上にブレイドガンナーが何なのかも全然明かされません。  
この章が終わるまでにはブレイドガンナーが何なのかを明かせると  
いいな…。

## 第02話「出発前のひとりье」

冒険者になつてまだ一週間もたたずく家に顔を出す」となるなんて思つてなかつたな。

まあ、いいか。そんなわけで、私は今、ヴァンと一緒に私の家の前にいます。

「いやあ、わすがにこんな早く顔を出す」とになるなんてね～

「まあ、仕方ないだろ～お前の希望を通すならこれが手っ取り早いんだからな」

まあ、いいですけどね。

玄関をノックしてじばりく待つ。すぐに「はーい」という間延びした声が聞こえた。その後、何かが倒れる音とガツシャーンといふ何かが割れる音が聞こえたんだけど氣のせいだよね？

それから、ちょっとしてから、扉が開いた。

「ああ、お姉ちゃんだ～。おかえり～。早かつたね

妹が対応をしてくれた。さつき転んだのは母であるらしく。ちょつとしたドジがいまだにならないんだから…。

家に上がり、妹に母を見ていてあげてと頼み、そのまま、父の部屋へと向かう。

「父ちゃん。いる~？」

と聞いたら、

「いるぞ~？ つづか、その声はアリアか。まあいい。入れ」と言われたので入る。

「早い帰宅だな」

「別にそういうつもりじゃないよ。はいこれ。依頼書ね。私たちがグレイバンまで同行するから」

「そうか。で、ちからさんはどうだれだ？」

「ヴァン＝アルトニアです。今は、アリアとパーティーを組ませていただいてます」

へえ、そんな敬語とかもできるんだ。

「アルテミアねー。まあ、いこさ。とつあえず出発は明日だ。明日集合場所に来てくれ」

「は~い」

その日はそのあと、ヴァンと一緒に買い物をして、宿に帰った。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

「ふむ。アルテニアか…」

そういえば、そんな偽名を奴も使っていたな。

「親子か？もしもそつなら血は争えんな…」

あの子が何を求めてヴァンとつり少年と一緒にいるのかはわからんが、あの少年が娘に悪影響を及ぼすことはないだろう。

「あなた～。ビニ～

呼ばれているな。行くとするか。

「どうした？」

「アリーナちゃんは行っちゃったのかしら？」

「まあ、明日から俺の護衛でグレイバンまで行くがな」

「さうなの。じゃあ、私も

「お前は自分の仕事をしろよ……。この前泣き付かれたぞ……。『メルティア様が～』ってな。いくら皆がやってくれるからってさぼるな。ただでさえ無理言つて普段はここで仕事してるんだからな。それにそろそろ一度行かないといけないんじやないのか？」

「うーん……。そうですね……。仕方ありません……」

全く。それにしても明日からは楽しみだな。あいつの実力を見ることができるからな。

\* \* \* \* \*

翌日、集合場所に行くと他の冒険者の方が既にいました。いたのは人数は4人。

「護衛依頼を受けた方々ですか？」

と声をかけた。

「そうだ。そちらもそうか？」

「ああ、そうだ。自己紹介は必要か？」

「そうだな。数日とはいえ一緒に仕事をするんだ。お互いを知つていた方がいいだろう」

そんなわけで自己紹介。

「俺は、バルバドス＝マルフィだ」

先ほど一緒に会話をしていたパーティのリーダーらしき人物だ。

「私はリバティ＝ウルス」

「グレイ＝ラング」

「私は、エルミィ＝アンリエットだよ」

あれ？護衛人数が多いよね？

「ああ、そのことか。多少多くてもいいいらしくてな。6人でもいい  
そうだ」

「そうか。俺は、ヴァン＝アルテミアだ」

「アリア＝スカーレット＝レヴァンティアです」

「レヴァンティア？依頼人なのか」

「娘ですか、一応護衛として来てますよ?」

「やうか。」やはり数年一緒に組んでいたパーティで、全員Bランクだ。グレイバンの近くの都市に用があつてなあいづらっこと思つて参加した

「ランクはロとじだ。グレイバンに用があつてこくへ

「やうか。 じざりよくひしく頼むわ」

話しあがめのを待つていたかのようなタイミングで父が馬車数台でやってきた。

「おつかれ。揃つてるみたいだな

「はー」

「じゅあ、出発するぞ」

やうやく父さんが言つたので出発する。

何も起じないといいな。

## 第〇三話「いとなお約束的ないといつてあつ得るんだへ

護衛として父さんのグレイバン行きの馬車について早五日、特に問題もなくここまで来てる。

途中に小さな村とかもありその村で品物を売つたりもしていたのちよつとばかり時間がかかっているのかな?

そんなことはいいとして、今通つてこるのは山道で結構きついです。

景觀も何もあつたもんじやない荒れた山道は通つてゐるだけで心がすたむよつた光景だね。やる氣が失せるつてもんかな?まあ、やるけど。

何もない山道自体はこの世界には何処にでもあるらしく。森とかが広がる山もあることはあるひつこねび、ほんとうにこんな感じの荒れ放題の山道だ。

しかも、しゃべることもなにかの世界には娯楽系の遊びがない。ただ黙つて歩くのは辛いものがあるのに、誰もしゃべらずただ黙つて歩く。

うつん。持ち前の想像力を駆使しそうにこの世界自体がファンタジーで私の想像を搖き立ててくれているわけで…。

あ、やつこえばあの理論もあと少しでできるんだった。論文をまとめないとかない。

と思つたんだけど、うつわけにもいかないみたいだね。

「嘘、何かが近づいてきてるよ」

「む、そつなのか？」

「みたいだな。何が来てるのかはわかんないけど、足音がするな」

マルフイさんが答えて、ヴァンが説明を加えてくれた。

「ふむ。警戒はするべきだな」

マルフイさんの言葉に私たちも頷いた。

その後、じぱりへたってもその足音は消えずにつづけてきた。ついでに、

「明らかにおかしいですね。動物ならついてくるなんてことはしないはずですし、魔物なら聞こえた時点で襲いかかってきますよね？」

「ああ、となると盗賊のかもな。警戒の度合いを引き上げるとしようか？」

警戒せずに何か起らると困るけど、警戒して取り越し苦労でも困ることはない。だから、警戒する。もちろん、何もないに越したことはないんだけどね。

せりに時間が過ぎてもその足音が消えることはなかつた。

山道を抜けゆくやく平地に出た。

足音はまだついている。一応、開けているのだから探せば見つかるはずなのに見つからない。明らかにかなりのスニーキングのスキルを保有しているとみてよさそうだ。足音自体は私とヴァンしか確認できていないから、何とも言えないんだけどね。

すると、父さんが馬車から顔を見せ言つてきた。

「そりそろ、休憩を取ろう」

そういうわれ休憩を取ることにした。

休憩を始めてすぐに父さんの部下の人たちが食事の準備を始める。私達は警戒を強め周りを見回る。

ちなみに足音は休憩を始めてすぐに聞こえなくなつた。やっぱり怪しいな…。

「ねえ、ヴァン。やっぱりおかしくない?」

「ああ、そりだな」

「言つたかないけど、お約束も的ないことつてあるのかな?」

「何が言いたいんだお前は……」

「ううん。気にしないで。それより、『飯の手伝い』よ？」

そのあと、私達はマルフイさん達に見回りを任せ、飯を手伝つた。

そして、『飯も食べ終わった頃にそのときはやつてくれた。』

\* \* \* \* \*

「おこ、おめえら準備はいいか？」

「おつよ、お頭ー！」

俺達は久しぶりの獲物に心を躍らせていた。最近このグレイバンへ向かう道を通りるのは冒険者等の屈強な戦士ばかりで全くと言っていいほど何もできずにいたわけだ。

そこにきて大型のキャラバンがやってきたわけだ。手下共による

と馬車数台に護衛はたつたの6人。舐め過ぎだぜ。

自分で言つのもなんだが、俺達は有名な盗賊団だ。

失敗したことは数えるほどしかないし、今までも大きなキャラバンをいくつも潰してきた。

効率を考えるなら大きなキャラバンをつぶすのが一番だが、大きなキャラバンほど警戒も強い。

だから、この数年は潰せそうなキャラバン以外は慎重に慎重を重ね襲ってきた。それ以外は小さなキャラバンばかり狙つた。

でも、やっぱり盗賊家業をやつてる以上は大きなキャラバンを潰すのが楽しいのだ。

だからこそ、今回やつてきたキャラバンは飛んで火に入る夏の虫ともいづべき最高の獲物なわけだ。

これを逃す手はない相手が油断した隙を狙つていると奴らは食事を始めた。だから、俺はさつきのような発言をしたわけだ。

「今回の獲物を逃す手はねえ！」

「「おひー。」」

「俺達の悪名をさうに知らしめるために！行くぞ、お前らー。」

「「おひー。」」

「では、こべぞー。」

「「「我らが『黒狼の牙』の名に恥じぬ略奪を…。」」」

その言葉と共に皿で襲撃をかけた。

さあ、良いものを積んでいてくれよ？

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

思つていたとおり、相手は盜賊だつたみたいだ。

大きな砂埃と共にいかにも盜賊つて感じの服装をした人たちが突つ込んできている。

だから、思わず私は呟いたやつた。

「」」なお約束的な」とつてあり得るんだ…」

「何を呑氣な」とを言つてゐるんだよ…。あれが「」」に到達するまで

「どうにかできなこな、俺は。お前はどうだ、アリア？」「

「出来ないことはないけど全滅はきつこかな。それにあの人たち結構強いよ？」

「君たち、何を言つてるんだ！早く迎撃の準備をしたまえ！」

「はい、じゃあ一発放ちますんで準備お願いします。あ、父さん。馬車の中にいてね」

私は声をかけると詠唱を始めた。

「君は何をするつもりだ」

「さあな。つつか詠唱中の人間に答え求めるのは間違つてるぜ。マルフィさんどこにも魔術師いたよな？」

「ああ」

「じゃあ、殲滅魔法せんめつ系はある？」

「残念ながらないよ~」

「緊張感ないな…。じゃあ、アンリエットさんはできる限り大きい威力の魔法を固まつてる所にはなつて下さい」

「は~い」

「お~お~、君たち本当にランクが低いのか？対処早過ぎだぞ？」

「そうですけど、いろいろ仕込まれてるんで。じゃあ、お願ひします。他の方は魔法から抜けてきた人たちを迎撃してください」

「わかった。君も準備を…」

ヴァンはそう言われて戦闘の準備を始めたようだ。つていうか最後の声ってラングさん？最初に聞いて以来久し振りに聞いたわ。

そんなことを考えつつ詠唱を進める。

盗賊たちはもう顔も判断できるほど近くまで来ている。そろそろ魔法を放たないと…。

「世界は凍り、大地は氷に包まれる…今、全ての世界は白銀となるん！」「キュートス！」

私が言葉を紡いだ瞬間盗賊達のいた場所が白銀の世界に包まれた。盗賊達は大地とともに凍りつき、ほとんどの盗賊がその場に縫いつけられる。

それでも倒し切れたのは全体の約3割。全部でどれだけいるのよーこの前のゴブリンより多いんじゃない！？

「いいから続けて打て！この人数をまとめて相手したら負ける！減らせるだけ減らせ！」

ヴァンにそう言われ続けて詠唱を開始する。隣に来ていたアンリエットさんは今詠唱が終わったようだ。

「水は満ちて、流し逝かん！フラッシュフルード！」

アンリエットさんが紡いだ言葉によつて起きたのは鉄砲水のよう  
に押し寄せる水の塊。押し寄せる水に飲まれ一割程度の盗賊達が流  
される。でも、これじゃ流されるだけなので私は追い打ちをかける。

「空は怒りを吐き出し、大地にそれを落さん…サンダーボルト！」

水は電気をよく通すという言葉にちなんで水で流されている奴ら  
に雷を落とす。感電し、次々と倒れる。

「次行きます！アンリエットさんもお願いします！」

「わかったよ～」

そう言つて魔法を放つ準備をする。さつきの「キューースみた  
な大型はもう使えないし考えないと…。

\* \* \* \* \*

一人が放つ魔法を潜り抜け来た盗賊を切り倒す。

自分の使つてる粗末な剣がいつ壊れるか分らないができる限りはやらないといけない。できれば『アレ』は使いたくない。だから壊してくれるなよ。

向かつてくる盗賊一人を切り倒す。

これだけの戦力差をもるともせず戦つてる自分たちもすごいと思うが、これだけの状況を見て今なお向かつてくる盗賊もすごいと思う。正直すごいと感じる。訓練されてはいないといえこのままとめ上げられているのはあり得ないことだ。これは、本当にやばいかもな。

「アルテミア！大丈夫か！」

「ああ！あんたこそ大丈夫か！」

「まあな！なるべくここで倒せ！馬車の近くにリバティを張らせてはいるがあいつ一人で全部できるわけじゃない！」

「分つてる！」

俺はそう言って、向かつてくる盗賊達を切りつけていく。倒しても倒してもきりがない。アリア達が放てる魔法は規模の小さいものに変わっていた。いまのまま行けば危険だ。

わかつてはいてもビュジョウもないひたすら向かつてくる盗賊を倒し続けるだけだ。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

何なんだこいつらは…。

既に連れてきた部下の半分は死んだ。

先代から続く、悪名高い『黒狼の牙』がたつた六人の冒険者が守るキャラバンを落とせないことはないはずだ。

なのにこれはどういうことだ？たつた六人相手に梃子摺る上に、五百近くいた部下はもう半分は切っている。

あり得ん！断じてあり得ん！

だが、田の前で起こっていることは紛れもない真実だ。

仕方ない。やるか…。

いくらなんでも全滅は避けなければならん。ここまで被害を出していく逃げるには不本意だが背に腹は代えられん。

そうして俺は、護衛をしていた青年へと特攻を仕掛けた。

\* \* \* \* \*

「野郎ども！撤退だ！」

そんな声が聞こえた。私はすでに詠唱をやめて武器での攻撃に切り替えていた。人数のせいか抜けてくる人数は意外と多かつたのだ。

でも、そんなことよりさつきの声はなに？撤退？盗賊が獲物に手を出して撤退するなんてありえない。

思いのほかこの盗賊達の頭は頭がいいらしい。

見てみると、ほとんどの盗賊はきびすを返し撤退をしている。

撤退していく方向をみると、大柄の男がヴァンに向かつて攻撃を仕掛けようとしているのが見えた。

それが見えた瞬間私はとある魔法を使つた。まだ完成といつには  
ちょっと不安が残る魔法だ。

「ソニックムーブ！」

刹那、世界はゆっくりと時を刻み始める。

ソニックムーブ

自らの肉体を加速し素早く動く魔法。なお、この魔法を使つてい  
る間は思考も加速される。

私は駆けヴァンの前に躍り出る。振り下ろされる斧を剣で受け止  
める。

ガキーン！

「何！？」

盗賊の頭らしき人物の声だ。

そりや、当たると思つて振り下ろした物が狙つた相手以外に受け  
止められれば誰だつて驚く。

「ヴァン、大丈夫！？」

「あ、ああ。助かった」

私は剣を上に力いっぱい払いのける。斧を持った盗賊の頭はすぐ  
さま体制を立て直しつでも攻撃できるぞとアピールしていく。

「まさか小娘に止められるとはな」

「これでも一応高等科は卒業してゐるけどね」

「まあ、いい。悪いが引かせてもらひ。これ以上の被害は御免こいつ  
むりたいんでな」

そういうと、盗賊の頭らしき人物は一目散にほかの盗賊達が逃げ  
て行った方向に向かつて走る。

「ちよつちよー！」

思わず声が出た。追おつとする者の魔力をかなり消費してしまつ  
てこらため正直きつい。動きも鈍る。

やうやくしてこら内に盗賊の頭らしき人物はかなり遠くに行つて  
しまつてこる。

やう思つてこると急に立ち止まり大声をあげた。

「俺は『黒狼の牙』の首領・ドン＝ガリバーだ！覚えておけ！」

まるで捨て台詞だと思つたがいまさらどうしようもない。

とりあえず今日のひとこと。

お約束つてあるんだね～。

### 第〇三話「こんなお約束的なことつてあり得るんだー」（後書き）

主人公に殺しへの葛藤がないですね…。  
まあ、主人公は結構達観してましてそこら辺の良心的呵責はほとんどないのかも知れません。

久々に長く書きましたね。戦闘描写も「アブリオン以来です。

## 第04話「やつと着せました鉱山都市グレイバン

盗賊の襲撃から数日。私たちは未だに平野を歩いていました。

都市と都市は結構遠いのは当たり前なんですが、ここまでかかるのはさすがにね。まあ、理由としては襲われたから警戒を強めるために少しうつくり進んでるからなんだけどね。おかげで一回魔物に襲われたけど難なく倒しきることができた。

進行スピードから言つてあと一日くらいでグレイバンに着くらしけど、本格的に暇だ。

とりあえず、グレイバンについてたら銀行行ってお金を引き出せ。つていうかこの世界に銀行なるものがあったことに私はびっくりしてるけど。

この銀行は、ギルドが運営していて一般人でも利用することができ。どの支店にお金を預け入れても、どこでも引き下ろすことができる。私の知っている銀行とまったく同じシステムを持っていた。私はちょっとした事情からお金を大量に持つてるからその全部を預けてるんだよね。

だから、まずグレイバンについたらお金を下ろしてから鉱石を買つていこうかなって思つてゐる。私の作ろうと思つてゐる武器を作るために必要な鉱石がどこまであるかはわからないけどとりあえず先立つものは必要だし。

そんなことで気がまぎれるはずもなく、私はこの後も退屈な護衛とこう仕事につきながらその日を過ごしたのだつた。

次の日。

ついに私たちはグレイバンにたどり着きました。正直もつと早くつけるはずだったんだけど、盗賊の襲撃とかでこんなに遅れるなんて…。

まあ、無事着けただけでも僥倖かな。

グレイバンに入り、広場までくると父さんが既にお金を渡す準備をし始めていた。

「おっ、今日までありがとうございました。一応、報酬上乗せしどうからギルドで受け取ってくれ」

「はい、では失礼します。

君たちもまたな。今度も一緒に仕事をできるのことを祈ってるよ」

「はい。ありがとうございます」

さう言って、マルフィィさん達は歩いて行つた。

「まひ、お前たちにも」

「あつがと、父さん」

「おつよ。みやあなた」

そう言って父さんたちも広場から散つていった。

何人かでたくさんの買い物をするらしいです。がんばってほしいな。

まあ、いいや。

「ヴァン」

「ん?」

「買い物行くからついて来てくれない?」

「当たり前だろ?でも、先に宿を見つけときたいかな」

「ん、わかった。じゃあ、先に見つけとこつか」

「おう」

そうして私達は宿を探し始めた。

見つけた宿はそれなりに値の張る宿だった。つていうかこの都市の宿は基本的にちょっと高めだ。だって本来ここは人が余り来るような場所じゃないから高めになってるんだよね。まあ、来るのは商人や鍛冶屋を営んでる人とかが多いし。

で、とりあえず荷物を置いて、私達は一緒に買い物に出かけた。  
部屋ですか？もちろん同じ部屋ですよ？

ギルドに行つてお金を取り、町に出て鉱石を売つている店を回る。

「ああ、これキスク鉱石…」*ひつかはレヴラ鉱石*…「ああ、もういいは天国…?」

「すごいテンションだな」

「うん!…だつて、こんなにたくさん貴重な鉱石があるんだよ!…鍛冶をやるものとしてこれはたまらないよ…」

テンションが上がりすぎてちょっとヤバい。

「アリアが笑つているならいい。俺としても鉱石には興味があるが、いかんせん免許を持つてないからな。俺は作るより使つだな」

「そういえばこの前の盗賊との戦いで剣が結構危ない状態つて言ってたよね?」

「ああ。家にあつたものだからな。最低でも2年は使つてるしな。手入れは怠つてはいけないがそろそろ限界だな使つていい感覺でわかる」

「じゃあ、私が作つてあげようか?」

私がそういうとビアンが驚いた顔をした。

「お前は免許を持っているのか?」

「ワーファーレ用の免許だつて持つてるよ。だから、なんでも作れるぜ~」

「お前はマジですか」こな。最年少での取得じゃないのか?」

「うん、やうだよ。でも、秘密にしてね。わざわざ隠してもうつしてるわけだし」

「別に言わなこ。で、作つてくれるって本当か?」

「うふ。剣でいいんだよね?」

「ああ」

「じゃあ、どんなのがいいの?斬るやつ?それとも吊き切るの?それともそれとも~」

「普通のでいい。頑丈な奴のがいいかな」

「じゃあ、斬れる頑丈なのでいい?」

「やけにだわるな」

「試験の時以来だからね。作るのが楽しみなんだよ~」

「やうか。まあ、それでいい

私は確認を終えると鉛口を買い始めた。

「ええっと、アイアン鉱石とギレルバ鉱石お願いします。後、ミス

リルと装飾用の金を貰えます?」

「ああ、良いぜ」

店の人へ注文を告げる。

「どのくらい必要なんだ?」

「アイアンヒギレルバが1・4バイン。ミスリルが600テインで  
ゴールドは100テインくれます?」

「あいよ。おめえら!アイアン・ギレルバが1・4バイン。ミスリ  
ル600テイン、ゴールド100テインだ!準備しやがれ」

「「「はい!親方!」」

「おめえさんは鍛冶師か?」

「はい」

「鉱石の選び方がいいな。気に入つた。俺のこの炉を使つてくれ」

「え? いいんですか?」

「ああ、俺が持つてる炉は二つあってな。ここに来る冒険者にもた  
まにいるんだよな使いたいってやるがな。だけど、おめえさんには  
俺が普段使つてる方を貸してやる。最高の武器を作るんだろ?」

「はい! ありがとうございます!」

いへして私のヴァンの劍作りが始まった。つまくぞれぬといいな。

第〇四話「やつと着せおした鉱山都市グレイバン」（後書き）

「ブレイブガントーはこいつ任せるのでしょうか……。  
このままこゝと別分出ないかも……。

## 第05話「アリアの作った武器」

俺は目を疑つたぜ。

さつき俺の店で鉱石を買つてくれた嬢ちゃんに炉を貰うことになった。

普段であればぜつてえにしねえことなんだが、嬢ちゃんが買つていた鉱石は明らかに特別な合金を作るためのものだった。

合金“ミルファリオン”。世の中にさほど出回らない最高クラスの金属である“オリハルコン”。これの性質をかなり劣るとはいえた現したのが合金“ミルファリオン”。

鍛冶師の中でも相当ランクの高い者しか知らないはずのこの合金の調合率を剣一つ分だけ買った。俺もそれなりに名の知れた鍛冶師であると自分では思つている。

しかし、俺だつていつ書つた合金を作るとときは大量生産する。理由は簡単だ。量が少ないと失敗するのだ。特にミルファリオンは作ると元あつた金属の質量よりも減つてしまつ。だからこそ、少ない量だとその調整が難しくどんな自信のある鍛冶師だつて滅多なことではない。

だが、この嬢ちゃんは明らかにこの量で作れるといつ眼をした。

だから、俺は炉を貸した。この眼で見てみたかった。これほどの自信を持ち、鍛冶をする嬢ちゃんをみたいと思つた。

そして、最初に言つたとおり俺は目を疑つた。嬢ちゃんが作ったのは合金の評価基準で最高のSクラスの合金だつた。ミルファリオンの評価基準の平均はCランク。だが、嬢ちゃんは難しいとされる少量での合金でSランクを作り上げた。

なぜ、ランクがわかるかつて？簡単だ。色からすでに嬢ちゃんが作り上げたミルファリオンは違つていた。オリハルコンとほとんど違わない光沢を発していた。

俺は、この嬢ちゃんに炉を貸したことその生涯忘れることがないだろう。

これほどの腕を持つ冒険者に貸せたことは誇りになりえるのだから…。

\* \* \* \* \*

ふう。じつやつて金属を混ぜること事態が鍛冶師の認定試験以来  
だつたから不安だつた。

私自身がこじりて武器を作るのは久し振りだ。

鍛冶師の認定試験は武器をひとつ作るといつものと筆記試験だ。

その時以来、つまり5～6年くらい前以来作っていなかつた。でも、知識通りに合金“ミルファリオン”を作ることができた。

アイアン・ギレルバが1・4バイン、ミスリルが600ティエン。ああ、バインは1・5kg 1バインは1000ティエン。

比率的に言つなら7・7・3。これがミルファリオンを作るまでの配合比率。

ハツキリ言つてミルファリオンはそこまで有名じやない。オリハルコンを真似て作られたこの金属は所詮は紛い物であり、本物よりも相当劣つてている。だから、制法自体がほとんどの文献に残つてなかつた。ちゃんとした物を作るのも難しい。

だけど、この合金は通常の金属よりも遥かに強度が高く軽い。混ぜた時に何が起るのかは解らないけど質量がかなり減る。

だからこそ、私はこれで武器を作ろうと思つた。

ヴァンがこの前まで使つていた武器は相当刃こぼれしていた。ヴァンの実力に対応できるような出来の剣ではなかつたんだと私は思つてゐる。

だから、强度が高くて軽いミルファリオンが思い浮かんだ。滅多に手に入らないような伝説級の金属があればいいんだけどあれらはものすごく高いしね。

私の作りたい武器にはそういった“金属”が必要だけどじつくり

集めて行ければと思つてゐる。だから、此処で買つておきたい金属はほとんどない。

まあ、そんなわけで、私はヴァンの武器をミルファーリオンで作ることにしたのだった。

カーン！カーン！

甲高い音が鳴り響く。

最近売られている武器のほとんどはすでに鍛造ではなくて铸造になつてきている。鍛造で作られた武器はとても強くて丈夫。铸造は大量生産に向いてるけどちょっともろい。

そんなわけで今はミルファーリオンを使ってヴァンの剣を鍛造にて作っています。

柄の部分は店長さんが用意してくれるそうだから今作つてるのは刃の部分。シンプルな形の剣にしてるけど、軽さと丈夫さを兼ね備えた私の魂のこもった一振りだ。

カーン！カーン！

そろそろ作り始めて一時間位たつ。

鍛造はさつき言つたように強い武器をつくるのに向いている。だけど、その分作るのにものすごい時間がかかる。

まあ、私としては「いつこじる」のは結構好きだからこいんだな。」

「ふー、できた」

「おー、嬢ちゃんできたのか?」

「はー、柄の方は?」

「用意できてるが、大きさ合わせにやこかんからな?」

「分つてます。持つて来てくださいませんか?」

「おー、こまもつへりあ」

せうこつへ店舗さんば柄を取りに行つた。

入れ替わりに、ヴァンが入つてきた。

「よお」

「うそ。どしたの?」

「こや、店舗が出てきたんで終わつたと思つたんだが、違つのか?」

「うそ。終わつたよ。正直、傑作と言つても過言でないくらいの出来だと自負できるよ?」

「何故に疑問形なんだよ…。まあ、いいや、ところどころ来たのはお前の武器を作る材料のためだり? 買わなくていいのか?」

「後で買つけど、主に必要なのは伝説の金属系統だからそつ簡単に購入できなって」

「お前は何を作るつもりだよ？」レジョンダリ云説は確かにす」「もんだが、使い勝手がいいわけではないだろ？」

「まあね。でも、最高のリアファーレを作るためには必要だと思つてゐるよ？」

その言葉を聞いて、ヴァンが固まつた。その後ろには柄を取つてきていた店長さんもいてもちろん固まつていた。あ、柄落としてる……。

「……お前、何を作るつて言つた？」

「リアファーレだよ？もちろん免許も持つてるぜ！」

「……。規格外すぎるアリア……」

「嬢ちゃん。それは嘘じゃないんだよな？」

「そうですね。何なら見ます？」

「いや、いい」

「そんなにす」「」と言つたかなあ……。

「それで、嬢ちゃん。レジョンダリ伝説の金属を探してるんだよな？」

「まあ、そうですね」

「ちゅうと待つて」

やつこって店長さんが再び出て行つた。あ、それとも、冷えたかな？

触つてみても大丈夫そつだつたので水からだし、刀身を拭く。

「綺麗だな…」

「うふ。まあ、Jのあと装飾入れるから大変だけね。鍔もつくれなくちゃいけないしね」

私はやつこへ、「ホールドを出す。

Jの世界にある金属なんだけど、多くの金属が私のいた世界の英語読みで全く同じ性質のものだつた。まあ、幻想金属もあるし、あつちになかつたような金属も多くあるんだけどね。

炉に入れてじぱりく待つ。出したら呪いて形を整えていく。

鍔は結構凝つたデザインにするわけでもないけどそれなりのものにしないとね。

鍔も完成し、柄を選んで剣をくみ上げる頃になつて何か大きな箱をもつて店長さんが戻ってきた。

「何ですかそれ？」

「アダマンタイトだ。お前にくれてやる」

思わず呆けてしまった。

呆けてしゃべれない私の代わりに、ブランが尋ねる

「どういひとだ、店長さん？」

「嬢ちゃんが言っていたふ。リアファーレをつくるつて。だから、俺が持つても使いそむないこれを嬢ちゃんにやううと思つてな」

「いいのか店長？」

「ああ、こいつも使つてくれる人がいる方がいいだろ。俺だつて使つてやりたいがこいつを使つて最高の武器を作れるほど若くはねえんだ」

「そうか。だが、ただでくれるとこいつですか？それは伝説の金属レジンタリですね。普通に売れば相当な金になるのでは？」

「そうだな。そういうなら、原価の三分の一でこいつ。それでこれを譲つてやる。俺はタダでもいいんだがな」

「本当ですかー？」

私は店長さんの話を聞いて思わず大きな声を上げた。

「ああ、俺としても嬢ちゃんみたいなのに渡せるなら本望だ。で、原価の三分の一でいいかい？」

「もう、原価でもこくらこですー！」

「あ、ああ。わかった。で、剣はどうした？」

「もう出来ますよ？見ます？」

「見せてくれや」

私は出来上がった剣を見せた。

「思つたとおりだな」

「？」

私は店員さんが言つた言葉の意味が分からなかつた。

「どうこいつ意味ですか？」

「俺の田は間違つてなかつたつてことだよ。元成品を見て確認した」

「わづですか」

「ああ、これなら悔いなくこいつをやれるからな」

「あつがどひいじれこます」

私は頭を下げる。

「で、お前さんまさかに買つていくのか？」

「はー。では……」

そして、私の初めての武器作りは終わった。

あ、ちなみに頂いたアダマンタイトは畳空間に放り込んでますよ?  
? だって、あんな重いもの持つて歩けないし。

## 第05話「アリアの作った武器」（後書き）

拙文の説明に関しては次回しますので、「」容赦を。

〔2011/08/04〕テストが終わったので投稿再開します。

## 第06話「闘技大会ですか…」

あの後、店長さんに必要な金属で、すべてを亞空間に放り込んで店を出でた。

今度、空間魔法で自分専用の炉を作つておひつかな…。

で、今はヴァンと一緒に食事中。剣を作るのに結構時間がかかるつて、もう夜だ。

「そりいえばだが、この剣の銘は？」

「ううん。ヴァンが決めちゃつていuinじやない？私、名前とかつけるの苦手だし」

「そうか。じゃあ、考えとくか  
といふで、先程の事なんだが」

「ん？」

「あの空間は何だ？」

「ああ、あれ？亞空間

一種の違う空間だね。一時的に空間そのものを作り出してるんだ。  
で、その中に入れてるだけ。維持に魔力は必要ないんだ」

「そりなのか。じゃあ、そこへ食糧とか入れておけばいいんじやないか？」

「問題がそこなんだよね。違う空間に放り込んでいたことには変わりないんだけど、あの空間での時間とかが止まってるけじやないし空気とかもあるんだよ。だから、食糧とか入れておいても腐っちゃうし、忘れると大変なことになりかねないよ?」

「やうひなのか、じゃあやつぱり必要な荷物は持ち歩くしかないのか…」

「まあ、服とかなら基本的に大丈夫だし、必要なもの以外は入れておけばいいんじゃないかな?」

「やうひか、じゃあやうひするか。

で、話なんだが店長さんの話に乗るか?」

店長さんの話。それは私がアダマンタイトをもう二つ、必要な金属類を買った後の話だ。

\* \* \* \* \*

「闘技大会ですか？」

「ああ、6か月にフイアナの防衛都市・コーンウォールで行われるんだ」

「それに出ひつてか？」

「違うよ。その大会の優勝者には伝説の中でも最高クラスの逸品である色金の一ツ緋々色金ヒヒイロカネができるそうだ」

「それってほんとですか！？」

私の作りたいと思っている武器には絶対に必要であるヒヒイロカネが優勝賞品として出るなんて。

「でも、なんで金属何ですか？」

「伝説レジョンダリは特別だからな。欲しがる奴はいくらでもいるんだ。最高の武器職人にそれを使って作らせるのが、半ば常識になってるな」

「そうですか。情報ありがとうございます」

\* \* \* \* \*

そんな訳で私達はそれに出すかどつかを話しあっていた。

「乗るうかなと思つてゐるよ?

だつて、ヒビイロカネなんて簡単には手に入らないもの。しかも、すいじく高いし

「やうだらうな……。だが、勝てるのか?」

「ああ?でも、勝てるように戦えぱいこんじやないのかな。やり方一つで変わるんだし」

「まあ、やうなんだが……。お前の実力はどうなんだ?」

「私?うひそ……。そうだね、アヴァロン学芸都市の戦闘科を卒業してゐるからだよ?」

私は真実をちゅうとほやかした。本当のことなんて言えないしね。

ちなみにアヴァロン学芸都市とはこの世界での最高の教育機関でアヴァロン学芸都市の卒業者にはほぼ将来が約束されていると言わ  
れています。

セイを卒業したところのだから納得せざるを得ないだらう。

「やうなのか?全く、お前には驚かされぬ……。まあ、いい。おれもあそこにはお世話をなつてゐる。うまくこなせばどちらかが優勝でき

「うだろ

「 なんだ。 だね。 じゃ、 参加する方向で  
それで、 今後はどうするの？」

「ローンウォールを田指しつつ、依頼を受けてるのがいいんじゃないか？」

そだね、そうしようか  
じゃあ、方向性も決まつたし、行いつか

「ああ」

こうして私達はグレイバンを旅立つた。

## 第06話「闘技大会ですか…」（後書き）

短い……。

これで2章は終りです。

次章は地球での話にするつもりです。

## 第〇〇話「修業をしましょー」

修行。それは、自らを鍛えさうなる高みを目指し行つものである。

「そんなわけで修業をしましょー」

あれから数日、私は皆の前でやつ話しした。

「どうこうとかちゃんと説明を入れてからって欲しいのだがな、  
杉浦氏よ」

厳太の言葉につなぎ私は説明を開始する。

「前に話した通り、茉莉ちゃんと会いに行くためには異世界に行く  
必要があるんだよね」

「うふ。せうだつたね。それでどうして修行の話につながるんだ?」

「だつて、その世界には魔法があるんだもん。魔物もいるし何もで  
きなかつたら死んじやうよ?」

私の言葉に3人は目をキラキラとさせる。まあ、3人ともオタク  
なわけだからそう言つシチューは大好物なのかな? そう言つ私も人の  
ことは言えないけど。

「で、どうするんだ? 魔法の練習でもするのか?」

「さうね。じつちの魔法があつちでも通用するかはわからないけど  
やってみる価値はあるかな?」

今は、そちらへんの調査のために行った人の帰還を待つているところだ。今日できるのは、皆の進む方向性を決めるだけだ。明日には調査に行っている人を戻すためにゲートを開けるらしいし。

「いちらにも魔法はあるのかね、杉浦氏」

「あるよ? 私の家はそういうものを管理する国の機関のトップだし」

魔法や陰陽術といったものをまとめ管理するのが家の今の仕事。将来は私もこの仕事に就く予定。

「では、今日はどうするのかね?」

「皆はどういう風に戦いたい? まあ、ある程度は適性を見て方向性を決める予定なんだけど……」

「僕は、魔法で戦つてもみたいけど、前に出て戦いたいかな。魔法戦士って感じかな?」

「涼歌はそれでいいと思うよ。もともと、動くのが好きみたいだし、適性もあるよ」

「俺も、そんな感じがいいかな。でも、どちらかといつと攻撃メインで補助魔法かな」

「ギルバート君もそれでいいかな。問題はないはずだよ」

「自分は魔法を使ってみたい。ファンタジーに魔法は欠かせないかな」

「らな

「たぶん、大丈夫だと思つよ? ジヤあ、方向性も決まつたし、家でやつてみよ!」

そして、私達の修行の日々が始まった。

## 第〇〇話「修業をしましょー」（後書き）

新章です。今回はファルテスト側の人の出番はないと思われます。彼らの修行ですが、単純に覚えてひたすら強化する感じになりますのでかなり話としては単調になると思います。  
まあ、事件やらなやらを起こして巻き込ませる予定ではいますがそういう描寫は下手ですので期待しないでください。

## 第01話「柿崎巖太の修行1」

まずは自分からとこうことで杉浦氏に連れてこられたのは大きなシェルターのような場所だった。

「杉浦氏、自分はいつたいこうで何をするんだ？」

「魔法の習得だよ。ちなみに巖太の修業は私が担当するね。よろしく

「ああ、よろしく頼む」

杉浦氏はそう言つてまず自分を近くにあつた扉から更衣室のような場所へと連れて入る。

「一応、危険が伴つから防護服を着てね

「了解だ」

自分はすぐさま着替えに入る。もちろん杉浦氏が出て行つてからだぞ？

着替え終わり更衣室を出るとすでに杉浦氏は準備万端といつたところだ。ちなみに防護服ではなく巫女服のようなものを着ている。露出度が意外と高い。これはもう巫女服ではなく、巫女もどきのロスプレではないのか？まあ、問題はないのだが。

「待たせたな」

「ううん。私も今さつきたとこだし。よし、じゃあ始めよっか」

杉浦氏はシェルターの床に魔法陣のよつたものを書き出した。

「魔法をもう実践するのか?」

「違つよ。巌太にはまだ魔法回路がないからそれを体の中に作る作業をするんだよ。はつきり言うと体を作り替えるんだよ。ちなみにものすごい痛みを伴うけど我慢してね?」

「わかった。では、やひうではないか」

すぐさま自分は魔法陣の上に立つ。すると杉浦氏は呪文らしき言葉を唱え始める。まあ、聞き取れはしないのだがな。

「巌太、やるから覚悟してね」

「うむ。来い!」

「彼の物に魔なる力の源をつくりしものを作り出せ。クリエイトマジックライン」

次の瞬間自分は大声を上げ、泣き叫んでいた。

痛いというレベルではない。体を引き裂かれているような感覚がする。全身に針を突き刺されているような感覚がする。体の内から弾け飛んでいくよつた感覚がする。全身に打撲をしたような痛みを感じる。ありとあらゆる骨を折ったよつた感覚がする。全身に耐え切れないよつた電気を流されているよつた感覚がする。他にもいろんな痛みが襲ってくる。

そつ、まるでありますとあらゆる拷問を一度に行つたようなそんな感覚だ。しかも、意識は飛ぶことがなく継続し続ける。

脳はその言葉を吐き続ける。いや、その言葉以外の言葉を紡ぐことができない。

延々と続く痛みの中に何か光を見つける。それは暖かな光でまるで自分を表しているようなそんな感覚を覚える。

必死にその光を掴もうともがく。掴めない。

手を伸ばす。全身を使い這いするよう元進む。それでもやつぱり

悔しい。虚しい。悲しい。色々な感情が生まれるが正の感情は一切浮かばない。

だが、諦めずに手を伸ばす。掴もうとして全身を動かし這いすり進んでいく。

そして、ようやく光の前までたどり着く。そして自分はその光を胸に抱くようにして抱き込んだ。

そして、意識は飛んだ……。

\* \* \* \* \*

目が覚めると知らない天井がそこにあった。

隣のほうを見てみるとギルバート氏と水鳥氏の姿があった。どうやら、自分と同じものをやり倒れてしまつたようだつた。

「あ、巖太。起きたんだ」

杉浦氏の声を聴きそちらを向く。

「やつぱりきつかった?」

「つむ、なんといつかな、全身にあつとあらゆる拷問をかけられたよつなそんな感じだつたな」

「うへん……。やっぱり感覚つて人によつて違うんだ」

ん？

「どうこういとだ？」

「痛みが伴うのは全員一緒になんだけど最初だけでそのあとの過程は全く人によつて違つの」

「なんと……。では、自分の痛みがずっと続く中に見つけた光を手に取るとこりのは……」

「うん。かなり珍しいね。まあ、実際には一瞬の出来事ですぐに倒れちゃつてるんだけどね」

意識時間の延長か。ふむ。なかなかに興味深いな。

「これで、魔法を使えるようになるのだつたな

「うふ。それははずだよ」

「うむ。では、明日よつやるとこいついか？」

「やうだね。今日からでもよかつたんだけど、みんなきつやうだし明日にしようか。

あ、そうだ。今日からしばらく家に泊まつてね。集中して修業するにまつてのほうがいいから

「では、荷物を持って再びここへ来ればよいのか？」

「うん。使用人に送り迎えをさせるから」

「助かる。では、またあとでな」

「うさ」

「うして、自分の修業初日は終わった。それにしても、あの痛みの感覚は一生忘れないであろうな。

第01話「柿崎巖太の修行1」（後書き）

姉のゲームは極悪です…。が終わりましたので再開します。

## 第02話「ギルバート＝レクティファーレの修行1」（前書き）

「2011/10/12」精靈 聖靈に変更しました。

理由はヴァルテストの精靈の定義が違つてしまつたためです。

設定資料に種族説明をしばらくしたら追加します。

## 第02話「ギルバート＝レクティファーレの修行1」

俺が連れてこられたのは道場のような場所だった。

ちなみに俺をここに連れてきたのは、俺の修行を担当するというメイドさんで未羅の専属メイドでありボディーガードであるらしこんで名前は月野梓つきのあずささんだ。未羅曰く「ものすごく強いよ。私の修行も見てもらつたから」とのことらしい。安心していいわけじゃないけど、頑張れつてことかな。

もう一つ言われたのは、「死にたいと思うかもしれないけど、絶対に弱気なことは言わないでね。メニューがひどいことになるから……」とのことだった。しかも、目が物凄い遠くを見ていたので正直何があるのか怖い。

「ギルバート様」

「は、はい！」

「自己紹介をしていませんでしたね。未羅様から聞いているかもしれませんが私は未羅様の専属メイド兼ボディーガードをしております月野梓と申します。ギルバート様の修行を担当させていただきますのでこれからじばりぐくの間ようしくお願ひしますね

「はい、お願いします。

あ、俺はギルバート＝レクティファーレです

「はい、よろしくお願ひします。では、まずは魔法回路を作りましょ

うか

「魔法回路？」

「はい、魔法を使うためには魔力を生成するための器官が必要なのです。それが魔法回路。ギルバート様の場合は大きな魔法は使わないことがありますが必要であるのは間違いないので、まずは魔法の習得からしてもらいます」

「分りました」

「では、準備をしますのでお待ちください」

そう言つて、梓さんは床に魔法陣を書き始めた。

書かれている文字を見るとルーン文字でだつた。やっぱり魔法つてルーンを使ったものなのかな？

「そうですね。ギルバート様は大きな魔法を使わないことなのでルーンを使用したものを習得してもらおうと思いまして」

「え？」

「見ておられたので、間違つていましたか？」

「い、いえ。その通りです」

「良かつたです。まあ、此処にルーンが使われているからと言つてルーンの魔法しか使えないわけではありませんが。では、準備ができましたのでお乗りください」

そう言われ、俺はすぐに書かれた魔法陣の上に乗る。

「始める前に聞かせていただきます。よろしくでしょうか？」

「はい」

「何故あなたは未羅様のわがままに付き合つのですか？」  
「う言つて  
はなんですが、魂の持主だからと言つてそれは違う人間なのです。  
危険を犯してまで付き合つことはないのではないか？」

「そうですね……」

黙り込む。確かにその通りだ。危険が伴つことなんだ。そこまで  
して茉莉の魂の持主に会わなきゃいけない理由はないはずだ。でも  
……、

「未羅がそれを望んだからです」

「え？」

「未羅はたとえ記憶がないとしても一度会いたいと言いました。  
俺はあいつの友達であり、仲間だと思ってます。彼女なら俺達に言  
わざとも自分だけでやろうとすればできただんだと思います。でも、  
俺達に相談しました、だからです。俺達を頼つてくれた。だから、  
俺はあいつを手伝つんですよ」

ハツキリ言つてしまえば、彼女の為にやるわけではない。これは  
自分のためもある。それに嬉しかったんだ。あいつは普段、俺達  
に相談なんて一切しなかった。だから……、

「だから、これは自分のためでもあるんですから……」

「失礼いたしました」

梓さんがあやまつてきた。

「え、何も失礼なことされてませんよ?」

「いえ、とてもぶしつけな質問をしてしまい、申し訳ありませんでした。あと、ありがとうございます。未羅様の友として仲間として下さって。今後とも仲良くしてあげてくださいませ」

「え、ええ、わかりました」

「では、改めまして始めましょうか」

「はい」

「始める前に注意事項です。この儀式には痛みが伴います。ですが、我慢していただけるとよろしいかと。後、痛みが通り過ぎた後に起こる現象に打ち勝つて下さいませ。そうすれば、魔法を扱うための回路が生成されます。時間がかかるともよろしいので必ず打ち勝つて下さいませ。では、始めます。心の準備はよろしいですか?」

「はい!」

そして、呪文が唱えられ始めた。

「では、行きます。

彼の物に魔なる力の源をつくりしものを作り出せ。クリエイト

## 「マジックライン」

そして、俺は異常な痛みを感じた。

全身を貫くような痛みだ。だが、それも一瞬だった。意識が閉じた。

次の瞬間、俺は全く知らない場所にいた。空が延々と続いている場所のようだ。見る限り空しかない。しかも、足元にはそれを映すかのような鏡のように輝く水が張られている。

前を見るとそこには少女がいた。

「へえ、ここに来る人がいるんだ。ようこそ、私の聖域へ」

「……」

「え、もうしかして知らなかつたりするの？」

「ああ、知らない」

「ええ～！？ちょっと待つてよ、あなた私のマスターになる人でしょ？なんで知らないのかしら～？」

「マスター？なんのことだ？全く分からぬ。梓さんの話では戦いになるのではないのか？」

「はあ……。まあ、いいわ。あなたは私のマスターになるのよ。ま

あ、私に勝つてもらわないと困るだけだね

「やうか。じゃあ、やうか。と、言いたいんだけどさ」

「何よ?」

「戦えと言われても俺は戦えるような力なんて持っていない

「はあーもう、何なのよ……、こんなのが私の新しいマスターなの  
?」

「悪いね」

「別にいいわよ……。はあ、じゃあいいわ。あなたは何を望んで魔  
法なんて物が欲しいのかしら?」

「友達のためだよ。自分は感化されただけかもしれないね」

「いいのかしらそれで?一生を無駄にすることになるのよ?」

「そうかもな。でも……、友を大切に出来ない人間はダメだと思  
んだ」

「合格」

「は?」

「だから、合格って言つてるのよ!」

「なんで?」

「だからー！私があなたを強くしてあげるって言つてるの！  
私はね、確かに強い人にしか力を与えてこなかつたわ。でもね、  
決して弱い人が嫌いなんぢやないわ。意志の弱い人が大嫌いなの。  
でも、あなたの意思はとてもしつかりとしていたわ。だから、私  
はあなたと契約するわ」

「あ、ああ」

「私は光の聖靈アストレイよ」

「ギルバート＝レクティファーレだ」

「よろしく、マスター」

「ああ、よろしく頼む」

俺はこうして、俺の生涯のパートナーと出会つた。

ちなみに、この後に簡単な試練が待つていただんだけど、そつちは  
アストレイのおかげで簡単に終わつた。

\* \* \* \* \*

目を開くとそこは医務室のよつたな場所だった。

「あ、梓）。ギルバートが目を覚ましたよ~」

「未羅」

「うん。気を失っちゃったみたいだね」

「ギルバート様」

「はい……」

「無事でよかったです。本来ならばすぐ起きれるそうなのですが、起きられないのですぐにここに運ばせていただきました」

そうなんだ。

「心配させてしません」

「マスターが謝ることはないわ。私のせいだし」

突然、アストレイが会話に入ってきた。

「つい、アストレイ！？」

「何よ？」

「何つてー。」

「驚きました……。まさか、聖靈と契約しておられたのですか……」

「まあね。私もこんなのと契約するとは思わなかつたけど、マスターの持つてた意思はすぐこじものだつたからね」

「そうですか。では、今後の目標は決まりましたが今日はもう終わりにしまじょ。後、今後の予定ですが、この家に泊まり修行してもらいます。集中して行いますので。

今から、あなたの自宅に送りますので準備してください」

「分りました」

「あの私ははどうすれば?」

「あなたはここに待機していただけると助かります。靈体化できるならばついて来ていただいても構いません」

「はーい」

「こうして俺の修行初日は終わった。今後俺はアストレイと修行するやうだ。今後どうなるんだろうな。

## 第03話「水鳥涼歌の修行1」

僕は水鳥涼歌。みずとりすが 僕が連れてこられたのは武道場だった。たくさん の武道を嗜む人がいても余裕で入りきれるような大きさでこんな広 い場所でやる必要があるのか正直分らないけどね。

僕を連れてきたのは未羅ととても仲のいいとこうメイドさんで 新人だそうです。まあ、未羅の専属メイドさんの梓さんに鍛えられ ていて相当の実力を持つてこらるらしいので疑うようなことはないん だけれどもね。

名前は波風瑠璃。なみかぜるり 僕の修行はすべて彼女の指導で行われる。ちょ つとばかりおどおどしていて頼りない感じの子だけど間違いなく彼 女からは実力をもった雰囲気を感じることができる。

「えっと、はい。では、今日からはじめてやります」

「はい」

「では、あの……その……」

「あの、もつと気をよく構わないよ?」

緊張でつまくしゃべれていない。

「年齢も近いようだし、もつと気楽にいかないか?僕は、堅苦し いのは苦手だし、そういう風に接されるのも苦手なんだ」

「はい、あの、数日すればたぶんなるので……」

「分ったよ。僕のお師匠さ

「僕が軽く茶化すと顔を真っ赤にする。

「あ、あの、まず今日は魔法回路の生成をします」

「ああ、魔法を使ったための回路だね」

「は、ハイなのです」

そう言いつつ瑠璃は床に魔法陣を書いていく。

「あの……」それが回路生成のための魔法陣です

「わかった。この上に立てばいいのかな?」

「は、はいです。で、では、始めますがその前にいいですか?」

「なんだい?」

「何で涼歌さんは未羅ちゃんのためこことなことをまでしてくれるんですか?」

「なんだ。そんなことか」

「え?」

「うまでもそんなことだ。だって、この質問の答えは一つしかないだろ?」

「だつて、彼女は僕の大切な友達であり仲間だからね。それくらい当然さ」

「そうですか……。未羅ちゃんは恵まれているのですね」

「君は違つのかい？」

「い、いえ。私は……」

「別に無理に言わなくていいさ。話したいと思つたときだけいつへ  
れ」

「は、はいです」

そう言つて、瑠璃は顔を引き締めた。

「では始めるです」

そう言つて、呪文のようなものを唱え始める。じばらくすると紡ぐのをやめ僕に向かつて話しかけてきた。

「この儀式には痛みが伴うのです。ですが、それも時間はかかるないので我慢してください。それで、痛みの後に試練のようなものがあるのですがそれに打ち勝つて下さい。いいですか？」

「ああ、いいよ。じゃあ、頼む」

「ハイです。では、

彼の物に魔なる力の源をつくりしものを作り出せ。クリエイト

## 「マジックライン」

彼女が言葉を紡いだ瞬間に僕の全身に痛みが走った。でも、我慢できるレベルだ。そして、僕の意識は闇に閉ざされた。

『気がつくとそこは石段の上だった。というよりも何処かの塔の上で田の前には石碑に文字が刻まれていた。

『汝、この剣を抜くものなりか？であれば覚悟せよ。彼の剣は誰の指図も受けず誰の意図も受け入れぬ剣なり』

僕の田の前には静かに存在している剣があった。まるで、主を待つかのように存在しながら誰にも使われないという矛盾を孕んでいる。

僕は剣に手をかける。しつかりと握る。

その瞬間、頭の中に声が響いてきた。

『汝我を求めるものなりか？』

「うん。そうだね。力を求めてここに来た」

『何故、我を求めた』

「魔法を使って戦う為に……」

『汝には覚悟はあるか』

分らない。でも……

「僕は迷わない。友達が困ってるんだ。助けられなくて誰が友達でいられるか！」

『良かるづ。汝、我を使うことを許す。その力を存分に振るうといい。

わが名は魔剣ディグラシア』

「僕は水鳥涼歌だよ。よろしく

そうして僕は自分の武器を手に入れた。

この後、大量のモンスターみたいのが出てきたけど剣を振るつて倒した。

最後のドラゴンはさすがにきつかったけど

\* \* \* \* \*

田が覚めると、そこは医務室だった。医務室がある家つて……と思つたのは秘密だけだ。

「あ、田が覚めた？」

「未羅。最後は僕？」

「え？ 何で？」

「ギルバートと巖太がいないからね。最初に魔法回路生成を行つたのは眞同じだと思ったんですね」

「す、すいね。その通りだよ。あ、瑠璃～。涼歌が田覚めたよ～」

「すみませんすみませんー私、まさか」「んなー」

「落ち着け」

未羅が瑠璃の頭をハリセンで叩く。ところが、そのハリセンビンから出したの？

「す、すいません……」

「いや、問題ないよ。気絶するもの想像通りだったからね

「やうなの？」

「ああ、痛みには慣れているけどもつぱん違つね」

「まあ、大抵の人は倒れるみたいだし」

「で、修行はどうだつた?」

「ドラゴンを倒した」

「は?」

未羅が驚いてる。何で?

「まあ、いいわ。普通じゃそんなの出でこないんだけど……。何か手に入れたりした?」

「うん。魔剣を手に入れたよ」

「はあ……、厳太といいギルバートといい何でみんなこんなに非常識なのかな……」

「どうしたの?」

「厳太は異常な量の魔力と魔法の特殊才能。まあ、本人は気付いてないし教えるつもりもないけど。それに頼らないように育てるかな。ギルバートは聖靈との契約。しかもその聖靈はかなり上位の聖靈で人型。

あなたは魔剣を取つてくる……。もづ、ありえないわ……」

未羅が頭を抱えている。

「まあ、でも育てがいがあるってことか。よし」

未羅はやつて部屋を出て行つた。

「あ、涼歌さん」

「ん？」

「えつと、今日から」の座敷ごと会つていただくことになるんですね  
けどいいですか？」

「ああ、修行を集中してやるのかー？」

「はい、そうです。それでですね、家まで送りますので準備してください」

「ああ、わかつた」

「ひして僕の修行初日は終わる。明日からも頑張らないと。

## 第04話「杉浦未羅の日記」

月 日 晴れ

今日から、皆の修行を始めよつと思つて自宅に招いた。

当初の予定通り3人には力をつけてもらわなければならなかつたし、異世界に行くとなればそれなりの準備も必要になるし簡単にいくものでもない。

それに皆には死んでもらつたら困る。だつて、死んじゃつた茉莉を探しに行くんだもん。何の為に行くのかわかつてゐからこそ無茶はさせられないし、皆には死んで欲しく

ないし。

だから、今日から皆の修行を始める。

皆が選んだ修行は私が思つていたとおりだつた。

涼歌とギルバートが前衛、私と厳太が後衛。

皆の性格からしてこれが最高の布陣だ。だから、普通に考えてたんだけど……。

とりあえず魔法を使えるようになつてもらおうと思つたんだけど、さすが皆だね。生糸のオタク根性が身についてたよ。

厳太は異常なほどの魔力と魔法の無条件融合。魔法を融合するこ

は結構大変な作業が必要なんだけれど、その工程をすべて無視して作り上げる能力。<sup>「シクリア」</sup>**対立す**

るはずの魔法でさえ無理や合成できるんだからその可能性は無限大にあるかも。教育方針としては魔法をひたすら覚えさせる。まあ、体作りも含めてね。魔法の無条件融合の

能力に関しては魔法をちゃんと扱えるようになつてからかな。

ギルバートは聖靈を引き連れて戻ってきた。しかも光の属性を操る相当上位の聖靈。これで、ギルバートは最強の盾と矛を手に入れたも当然だ。聖靈はもともとハンパじや

ない力を持っている。彼らは自分の意志だけで魔法を発動しうるし危険極まりない。それと、契約したんだからすごいといえるけど、今後の教育方針は彼女との連携及び彼女

を操るすべを覚えてもらうことかな。

涼歌は魔剣を取つてきた。闇の魔剣ティグラシア。私も知つていふほどの有名な魔剣。神話等に出てくるものじゃないけど、裏の世界では有名になつた魔剣。闇を完全に

操ることができて、なおかつ、剣としても相当優秀な剣なのだ。ハツキリ言つてギルバート同様に扱い方がめんどくさいかな。教育方針は単純に魔剣の制御と魔法の鍛練。ま

けんに関しては完全に使いこなせるようになつてもうわないとね。

これで、方針は決まったかな。よし、明日からがんばろう！

月 日 曇り

正直樂観視してたよ……。この3人……生粋のオタクというよりも最強クラスのオタクだった。

何でかつて？修行初日でなんで、魔法を使いこなしてる上に動きも完璧なのよ！

おかしいでしょ！

はあ。田記にこんなこと書いても仕方ないか……。とりあえず、事実を書き連ねよう。

まず、巖太だけど……、私が教えたことを片っ端から吸收。魔法の実習に入る頃にはオリジナルの魔法すら作り上げていた。

ギルバートは、何といふか聖霊との連携が必要だと思つていたのは確かだけど、昨日契約して何で次の日には完璧な連携ができるのよ！

涼歌はまあ、許せた。あの魔剣には身体能力の向上も含まれているはずだから、修行相手の瑠璃なんてすぐ超すだろう。ただまあ、闇の操作だけはまだできていないみたい

で安心したけど……。

一応、調子づく前に鼻つ柱を折つとくのもいいかもしない。私

一人で今の階に勝つのは正直言つちゃなんだけど余裕だ。調子に乗つて何か起こすなんて馬鹿らしいしその

前になんとかしてしまおうとな。

私も一応は魔法使いだしね。プライドは高いのよ。

月×日 雨

今日は三人を相手に模擬戦をやつた。

まあ、やり始めたばかりだけど調子づく前に叩いておいたかと思つてね。

まあ、当然私が勝つた。そりや、小さじこじらからやつてるんだもんそう簡単には負けられないわね。

私の戦闘スタイルは確かに相手にとつてはきついものなのかもしれないけどこれぐらしさばけるようになつてもらわないと

と言いますが、3対1でしょ？ もうちょっと奮戦してほしかったかな。

まあ、今後の修行方針は取りやすくなつたから良しとするか。

月 日 晴れ

模擬戦から位週間近くたつて3人とも動きがかなりきれいになつてきている。

皆、ありえないくらいの才能の持ち主だから成長速度は早くて当たり前だけどね。

とりあえずの目標は3人で打倒私らしい。まあ、そう簡単に負けてあげるつもりは全くないけど。

月 日 晴れ時々雨

お天気雨が降った。

じつはこの日には大抵何か起ころうからたまつたもんじゃない。

まあ、逢魔ヶ時には実際に表してくれたわけで……。仕事です、はい。

皆にはまだ早いからとりあえず付いて来てもらつて見てもらいました。

見てもらつた結果、皆さらに張り切つてくれた。修行には心も大切だから正直助かる。

ちなみに今日倒したのは大鬼。正直疲れたけどね。

月 日 雨

やつぱり皆天才だ。たつた一日で敵を想定した戦い方に変わつていた。

実際に訓練と実戦は違つから訓練だけじゃダメなんだけど、実戦を田にしてどうすればベストなのかすぐに理解したらしい。

確かに、そのほうが助かるんだけど……。私たちいるいみあるのかな～？

だつて、ほんと教えなくともすぐに次の段階へ進んでいるんだもん。やつづらこつたらりやありやしない。

まあ、その分楽できるから別にいいんだけど。

月 日 晴れ

明日の午後、調査に行つていた人を戻すらしい。

時間はかかつたけどこれで、茉莉のいる世界がわかる。

これで、逢いにいける。

楽しみだ。

とりあえず、早めに寝た。

## 第〇五話「調査員の帰還ですか」

「え？ 2年近くあつかった？ どうこういとへ？」

私は梓・瑠璃と一緒に調査に行つていた人の話を聞いていた。

「私としてもびっくりしました。一か月後にゲートを開くとの話だつたのですが、一ヶ月後経つても開いておらず、仕方なく待つていたのですが開いたのは2年近くたつてからでした」

「と、言ひとせ……」

「はい。時間の流れが違うと思われます。倍数でいうと18～22倍ほどのスピードはあるかと」

「なんてこと……」

予定では茉莉は赤ちゃんでもつと簡単に見つけられる予定だったんだけど、完全に私の計算違いになつた結果だ。といふか、その結果は考えられた結果の一つだつたはずなのに考えてなかつた。

「まあ、幸いあちらで2年近く過りましたが私の年齢はこちらでの年齢に合つみたいでするので実質一ヶ月分しか年取らないみたいですね」

「それは、本当に幸いですね末羅様」

「幸いかどうかは分らないよ。とりあえず、もつ一つ聞きたいことがあるからね」

「何でしうつ？」

「使えた？」

「はい。使いました」

「やう、よかつた。じやなこと今やつてが全部無駄になるしね」

「やうですね。では、私はこれで。がんばってくださいね」

「ええ、悪いわね。私事に巻き込んで」

「いえ、未羅様の役に立てたのですから問題ありません。では、失礼します」

そう言つて、調査員は帰つて行つた。

「はあ、じつじましきうね」

「どうしようも向もないのです?」

「予定は全部狂つたよ。はあ、茉莉が転生してゐてわかつて浮かれて可能性の模索を全部放り投げてた私の責任だよこれは」

「未羅ちゃんは悪くないよ。やるべき事はハッキリしたんだし、卒業式まであと一か月近くだよ。がんばろうよ」

「やうね。はあ、まったく、私は何をしてるんだか……」

私はため息をつく。この事実を早くみんなに伝えて茉莉を探す旅はかなりきついものになるって伝えとかなきやね。

「じゃあ、2人ともギルバートと涼歌へひやんと伝えてね。じゃあ、今日の修行を始めましょう」

「分りました」

茉莉。絶対会いに行くから待つてね。

## 第0-1話「え？それってつまり、私の話が聞きたいの？」

「コーンウォールまでの道のり、小さな村やそれなりの町などによつて依頼を受けたりしながら私とヴァンは旅をしてました。

依頼の話ですか？ハツキリ言つて私達にとつては簡単な依頼が多くて問題なく終わりましたとも。最初の依頼のようなこともなく、普通に終えただけ良かつたのかも知れないけどね。

それで、後数個の都市を超えるばコーンウォールといつといふまで来た都市で私は会いたくもない人物に会つてしまつた。

「あら？アリアさんではありますんか？」

「げ、マリー！？」

何とそこにいたのは、アヴァロン学芸都市にいた時に同期で常に成績トップを維持していた帝国のお姫様・マリー・ゴールド＝ジルヴァルド＝マルティクス＝グランティールだった。

「何？私と会つたのがそんなにご不満かしら？」

「あんたと会いたいわけないじゃない！…といふか何でフイアナ王国にいるのよー？」

ああ、フイアナ王国つて言つるのは私の生まれた国で今いる国ね。ちなみに帝国の正式名称はグランティール帝国ね。

「何つて、私はコーンウォールで行われる大会に出て来いと叔父様

……現国王に言わされて来ましたの

「あ、『』めん……」

マリーの父。つまり、帝国の先代国王はマリーの在学中に死んでいる。マリーには兄もいるんだけど、先代国王様が死ぬとは思われてなくて今は軍で功績を積むために修行中で、マリーは学校にいた。だから、当時世継ぎがいなかつたこともあって先代国王の弟、マリーの叔父さんであるブライアン=ゴルント=マルティクス=グランディールが一時的に国王の座についてるんだよね。

「いいですわ。とこりでなぜあなたもここにこるんですの？」

「あんたと回じよ。まあ、目的とかは全然違うけどね

「やうですの。では、大会でお会いしましょ。あなたが本気を見せてくれるのを楽しみにしますわ」

そういういで、マリーは歩いて行ってしまった。

「どうか、私に本気を出せと? 無理無理、本気なんて出したいたら私の正体ばれちやうじやん。

「今のは?」

と、ヴァンに聞かれた。まあ、当然だよね。

「マリー=ゴーラード=ジルヴォルド=マルティクス=グランディール。帝国の現第一王女よ。王位継承権は2位。今は、彼女の叔父さんが王位についてるけど彼女の兄が戻り次第変わるでしょう。まあ、

同級生だったのよ

「やうか。まあ、そんなことなどともかく宿を探して入るやうか。時間もやうそりきつこしな」

やう言われて、私とヴァンは宿を探すのだった。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

宿屋の部屋で一息つこうと、ヴァンが口ひらつてきた。

「やうじえば、お前はアヴァロンの戦闘科卒業だったよな

「うそ、やうだなびがビーフしたの?」

「帝国の姫さんが同級生って言つてたよな?」

「うそ、まあな

「どうか、お前とそれなりの知り合いで見えたがどうなんだ?」

「えっと、それは遠まわしに聞いてるの？」

「まあ、正直お前は不思議過ぎるんだ。俺も人のことは言えないがな。だから、ここでそれぞれの素性とかを明かしつかないか？今後も一緒に冒険することになりそうだしな」

「うん、そうだね……。ま、いつか」

「それで、まずはお前の話から聞きたいんだがいいか？」

「え、それってつまり、私の話が聞きたいの？」

「聞けるならな」

私は正直迷った。ハッキリ言って私はある意味チートな存在だ。チートな力を持つてなかったとしても、溜めに溜めたオタ知識を総動員して今まで相当な研究とかしてきたしね。知られたら困るようなことだってたくさんある。でも……、

「まあ、いいよ」

「本用にいいのか？」

「まあ、了承したのは私だしね。じゃあ、まあ、ここで辺の話からかな？」

そうして、私は私の過去の話をヴァンに語り始めた。

## 第01話「え？それってつまり、私の話が聞きたいの？」（後書き）

第03章ですがなかなか話を考えるのが難しいです。どうが、時間軸が違うのでどう話を作つても本編との関係はほとんどないません。

ということで、今後少しづつ追加していくところの形を取ることになります。それに伴い、第03章を幕間、もしくは間章という形に代えさせていただきます。申し訳ないんですがそりやせていただきます。

後、誤字雑字等の報告。感想等もお待ちしています。

## 第02話「静かに、目立たないみひみ……」

アヴァーロン学芸都市の戦闘科に入学して4年経つた今、私は大人しくしていた。

入った当初はちょっと調子に乗つていて頑張りすぎた。結果目立つて仕方なかつたので、私はだんだん落ちこぼれていつたように見せかけて成績を落とし、今では中間程度の成績に見せかけつつ秘密裏に魔法の論文を書きあげたりしていた。まあ、授業の内容が既に学んだ内容だつたりしたのは僥倖だった。おかげで授業時間は基本的に論文を誰にも見られないように書いてたりする。

戦闘訓練等ではちょっとばかり苦労したんだけどそれなりにこなしている。まあ、わざと負けるように仕向けてるもんでも戦闘ではビリに近い位置にいることになつてるので。

その日も私は、静かに、目立たないみひみしていただんだけど、完全に失敗しちゃつて……。

授業中、やつぱりやつてている内容はすでに本とかで学んじやつている内容だつたから、私は新しく開発していた魔法の理論のくみ上げをしていた。まあ、戦闘技術とかの授業だけはちゃんと受けるんだけどね。

「ええ、JJKの術式は…………」

先生が何か言つてゐる。先生の言葉をBGMとして聞きながら、やるのは絶対に失礼だけど、わかつてゐる内容をやつても仕方ない

しね。まあ、先生たちの印象は最悪に近いんだけどね。だって、授業をちゃんと受けないで成績だつて中間程度なんだもん。そりゃあ、田を付けられるよね。

あ、先生その理論間違つてますけど。まあ、言わないけど。

そんなこんなしてひげに授業も終わり、終了の鐘が鳴った。

「では、授業を終わります」

立つて礼をする。

よし、終わつたー。と、思つて教室を出でていこうとしたところで先生に呼びとめられた。

「生徒アリア。あなたに呼び出しがかかっています。今すぐ、マクガルド教授のところに行きなさい」

「はい！」

思わず言つちやつたよ。

「どうか、私に呼び出しがかかるとか絶対にあり得ないし、最近何か変なこともしてないし、見せかけだけならちゃんと授業受けてるから、素行不良ってこともないし。ってか、マクガルド教授つて現在最も賢者に近い人物として有名な魔導師の方でしょ？そんな人が私を呼び出す？あり得ないし。

「とにかく行くよ！」

「は、はい……」

本当に私何かした？そつ思いつつ、私は教授の部屋に足を向けるのだった。

部屋の前に付き、ドアをノックする。

「アリア＝スカーレット＝レヴァンティアです」

「ああ、入ってくれ」

入るとそこにはどう見ても青年な人が足を組んでイスに座っていました。というか、やつぱ見た目は若えなこの人。

この人はマクガルド教授。種族は妖精種のエルフ。なもんで、見た目がほとんど年取っていないけどこの人確かに100歳余裕で超えるはず。

「この度はこんな成績の悪い私に何かご用でしようか？」

「相変わらず君は卑屈だな」

余計なお世話です。確かにあなたの授業はほかの人の授業よりもしかから受けてるけど、やつてることはやつぱりいまいち物足りないんだよね。

「まあいいや。今回呼んだのは君のことについて聞いて聞こいつと思つてね？」

「なんですか？生徒を口説くつもりですか？」

「ははは、いつもながら手厳しいね。そんな簡単なことで済むなら良かつたんだけど」

そう言つて、教授がとりだしたのは紙の束。どう見ても論文のようなものだった。って、それ私のじゃないのー。

「……何でそれを先生が？」

「何つて、君が忘れてったんじゃないかい」

そうだったー！前忘れてつてどうせ私の机なんて見る人居ないからって放置してたんだったー！明らかにこれはミスだ。やばいよ、見られたらかなりヤバいものが書いてあつたりするのに。

「これに書かれている内容だけぞ……」

聞かれてたまるか！先手を打つ！

「すいませんが答えられません」

「それが通用するとでも？」

まあ、そういう来るよね。

「ござとなれば、教授でも張り倒すつもりです

「ふうん。僕とやり合いつもり？」

「あくまでもこざとなればです」

私がそう言つと、教授は顎に手を当て何かを考えてる様子だ。そしてしばらく待つていると私に向かつて提案した。

「君には、<sup>ワイスマン</sup>賢者になつてほしいんだ

はい？」

「僕では生涯かけてもたぶん<sup>ワイスマン</sup>賢者にはなれないんだよ

「何を言つてるんですか。現在最も<sup>ワイスマン</sup>賢者に近い人物が

「事実だよ。この論文を見て僕は衝撃を受けた。ハッキリ言つて僕は古い人間だ。まあ、エルフなんだけどね。だから、基本的に新しいことではなく古いことを基準に考えてしまって全く研究が進まない。だが、この論文に書かれていたのは完全に新しい技術としか言いようがないものだつた。だから、僕は君を呼んだんだ」

「はあ」

そりやそうでしょう。だって、私は前世で得た知識を総動員して魔法を考えたりしてるからね。理論さえ分かっちゃえば後はそれに合わせて組み替えるだけでできるんだもんね。

「というかですね、分かつてるはずですよね。私が何でわざと成績を下に見せるようにしてるかつて」

「分かつてはいるだ。だが、早いうちに新しい<sup>ワイスマン</sup>賢者が必要になるん

だ。今の魔法技術は完全に停滞している。それに新たな風を吹かせ、もう一度、活性化させるためにね

「嫌ですね。目立ちたくないんですって」

「別に変身魔法を使って別人として表彰してもいいみたいに嬉しい

こともできるが？」

「マジですか？それなら……」

「って何私は懐柔されそうになってるんですかー！」

「ー？ 吃驚させないでくれ」

「というかですね、それらの魔法技術を公表するつもりなんてほとんどないですよね？」

「ふむ……。だが……」

そのあと私は2時間近く教授と論議する羽田になり、ついに私は

……

「ああもうーわかりましたーやればいいんでしょうやればー」

折れてしましましたとさ。

「そりが、ありがと」

そのあと、私は賢者になるためにいくつもの論文を提出する羽田になった。で、この数か月後その流れで教授の権限使ってリアファ

ハイタク

一の鍛冶師免許と普通の鍛冶師免許の取得を隠ぺいしてもらいました。まあ、それはまた別の話なんだけど。

ひつして、私の静かで穏やかになるはずだった学校生活はあと数年を残してあわただしいものになってしまいましたとや。

## 第02話「静かに、目立たないよう」（後書き）

グダグダです。

次回にはマリーさんが登場できればいいかなと思つてます。ちなみにマリーさんですが金髪ロールのどう見てもお嬢様な感じのお方です。性格は高飛車に見えて実は結構世話を焼きだつたりします。そんな感じのマリーさんもゆくゆくは主人公のパーティーに……。と思っていたりもしますが、加入は間違いなくもっと後になります。

次回の更新は違う作品の投稿が終わってからになります。

## 第〇三話「なんで突っかかってくるんですか？」

あれからとこりもの、私は前よりも遙かに大変な日々を送っていた。授業中は必要な授業以外全部で授業そっちのけで論文を作成する日々。夜もまともに寝れてませんね。このままじゃいつか倒れるかも……。まあ、倒れる前に魔法である程度回復できるんですがね。あくまで誤魔化すだけなんで使った日はよく寝るんですが。そんなわけで、忙しい日々が続いております私、アリアです。

そう、そんな日々を送っていたんですが、度を過ぎていたんですね、ついに私は関わりたくない人物に絡まれることになりました。

その日、私は授業そっちのけで論文を書き続け、あまりにも書くことが多すぎてようやくまとめ終わる頃に授業が終わってすぐに机に倒れ伏した。ああ、今すぐ寝てしまいたい。だけど、この後の昼休みには論文を教授のところに持つていかないといけないし、その前にご飯を済ませないと……。ああ、次の授業の課題忘れてた。一応受けてる以上はやらないと。ああ、面倒くさい。

まあ、そんな感じでやる気が出なくて突っ伏してたんだけどこれが間違いだったね。さつさとご飯を食べに行って論文提出しに行けばよかったです。そうすれば、“あの子”に絡まれることもなかつたんだよね。

「あなた」

「ふえ？」

声のした方に田を向けると、そこにいたのは金髪ドリ……「ごほん」ほん、金髪縦ロールのお嬢様みたいな人が立っていた。ええつと、この人は確か、誰だっけ？ だめだ、完全に頭が働いてない。

「何情けない声を出しているのかしら」

情けないですって。その通りやー。だつて、頭働いてないんだもん。

「ちよつといいかしら?」

何？ 私この人の迷惑になるよつなことしたかなあ……。まあ、そんな暇はないし、悪いけど断らないと。

「嫌です。この後、時間が詰まってるんで」

「関係ありませんわ。付き合つてもらいます」

それは、強制ですか？ ふざけんじゃねえです。こちどら、ただでさえ時間に追われてまともに寝てもないんだから気が立つてるんです。時間も本当にないんですけど。

「嫌です。では、さいなら」

私は、捕まるわけにもいかないから、私は早々に退散させてもらつた。もちろん追つてきただけど、撒かせてもらつた。その後、私は論文を持っていったり、午後の授業を受けたりと、忙しく一日を過ごした。ちなみに、夜はあまりにも眠くて論文はやめて寝た。久し

ぶつに倒れそうになる前に寝る」とした。

次の日、ものすゞく寝坊して遅れて授業に参加した。いやあ、久しぶりにたくさん寝たんで快調、快調！もちろん、授業中は論文を書いてたんだけど、頭がすつきりしてゐせいかものすゞいたさんアイデアが浮かんでくるね！

そんなこんなで、昼休み。書いてた論文を誰にも見られないようにしてからすぐに食堂に向かおうとしたとき、私の前に誰かが立ちふさがった。

それは、昨日私を呼びとめた金髪ドリル、もとい金髪縦ロールのお嬢様らしき人だった。

「今日はわざわざあってもらいますわよー」

「はい？」

昨日もさうだけど、この人は何で突然私に突つかかってきたんだろ？一応、授業は受けているように見せているし、問題はなかつたはずなんだけどもしかしてばれてたりするの？

「いいですわねー！」

「嫌よ。私があなたに従わなきやいけない理由はないもの。それに、あなたにつき合ひ理由なんてないしね～。じゃねえ～」

そうして、私は逃げ出した。その後、教授の部屋に行って論文を

受け取つて、とりあえず、論文を直して、その日は終わった。え？午後の授業は？戦闘訓練だつたので出ましたよ？まあ、次の論文の内容を考えながらやつたんで、もちろん全然動けませんでしたけど。

その日からとこりもの、毎日と言つていいほど、金髪縦ロールのお嬢様は私に関わってきた。正直、こり、なんというか纏わり付かれてる訳じやなくて、何か言いたいことがあるみたいなんだけど、私としては聞いてあげる時間自体が貴重な時間なもので、聞いてあげられるような時間もない。そんなこんなで、私は自分の周りで自分がどう思われているのかすら知らず、悠々自適に過ぎ」していたのだった。

そして、その日は訪れた。

「もう我慢なりませんわ！」

お嬢様はそう言って、私をロープで椅子に縛り上げ動けないようにしてしまった。この程度ならすぐに抜け出せたんだけど、今は劣等生のように思われるんだから、そんなことは軽々しくできない。

「あの、その、なんで私にそう突つかかってくるんですか？」

つい聞いてしまつた。まあ、逃げられないんだし仕方ないか。

「自分で何も気付いてないなんて愚かにもほどがありますわ」

むかつ。つとしたり抑える。」」」」怒り切やうと絶対に全力を出す羽田になる。そしたら、教授に半殺しこれかねない。

「あなたみたいに不眞面目な生徒のせいでたくさんの人たちが迷惑を被つてます。そこを注意させていただきたいんですね」

え？

「あなたが眞面目に授業を受けないせいでも多くの先生方が困つておられますし、まあ、成績はいいようんですけど……、それに戦闘授業でも、眞面目に取り組まず戦闘相手にされた方々から不満が漏れていますの。それにすら気づいてないんですの？」

マ・ジ・で！？

知るかよそんなこと。」」」」最近、教授のせいに寝不足に次ぐ寝不足だし、論文は授業中でも書かないといけないし、内容考えるのに戦闘系授業は最適だし、周りのことなんて気にしているからってんだ。つか教授へ、そこいらへん手を回しておいてくれる話だつたんじゃないんですか？

ど、まあ、私はいつの間にか学校位置の不眞面目不良学生にされましたとさ。これ笑うところかなあ？

「せうなんだ。でも、私には関係ないかな

「んなー！？」

「だつて、やらなきゃならないことが溜まってるんだもん。授業の

内容はちゃんと頭に入れてるし、成績だってある程度を保ってるよ。戦闘系だって成績が悪いけど、合格ラインには届いてるし、問題ある?」

まあ、普通に考えたら問題しかないんだろうな。でも、やつてなくともちゃんと結果を出してる以上は文句は言わせない。

「う……」

「まあ、そんなわけでこれ取ってもらえる? 時間も押してるんで」

いりして、私と金髪縦ロールのお嬢様・マリーとのちゃんとした邂逅は幕を閉じた。まあ、これからだね。マリーが何かと私に突っかかってくるようになつたのは。というか、仲が悪いというか、犬猿の仲? になつたのは完全に私のせいだよね。まあ、嫌いではないんだけどさ。

ちなみに、教授にあとで話を聞いたところ、あくまで手を回せるのは最終結果(表面的には悪いほうの成績が出てますよ)だけであつて、不平不満はどうにもならないんだそうだ。

まあ、諦めるしかないんだろうな……。

## 第〇三話「なんで突つかかってへるんですか?」(後書き)

なんといふか、学園の話つて戦闘書きづらことですね。といふか、戦闘させるようなシーンが一切出でこない。どうしまじょい……。まあ、なくとも問題ないんですが。

というわけで、マリーさん（同級生版）の登場です。ちなみに、町であつた時の髪型はゆるふわなウェーブのかかつたロングヘアです。

今後も結構かかるキャラになるとと思うんで期待してください。個人的には書きづらいことこの上ないお嬢様キャラになってしまつていますがね。まあ、好きではあります。

では、感想等もお待ちしております。誤字などもありましたらよろしくお願ひします。

## 第04話「賢者に任命されました」

あれ以来、たまに突っかかってくるマリーをかわしつつ私は論文を大量に書き上げた。そろそろ、2~3ヶ月経つんだけど、もう50以上は論文を書いてる気がする。ここまでたくさんの論文が必要なのかな~?

で、そんな事を考えていたら突然今日中にこんなことを言われた。

「アリア君、君の賢者ワイスマン任命が決定した」

「……。はい?」

思わず耳を疑っちゃいましたね。

「何を驚いている。最初からそういう予定のもとでやつていただろ?  
?」

「ま、まあ、そなんですが、いくらなんでもこんな早く決定するとは……」

「君のレポートを持つてくるスピードが速すぎたんだ。私としてもさすがにあんなに早くたくさん人のレポートを持つてくるとは思つてなかつた。半分は冗談で言つたのにまさかそれを本当にやつてくるとは思わなんだ」

「はあ!~?何ですかそれ!~?」

「君が文句を言わはずやつてくるんで[冗談と言えなくなつたんだ。全く  
く、どうやらあの量での質のレポートをあの速さで書けるの  
かわからぬ]よ」

「もういいです。で、私の任命が決まつたんですね?」

「ああ」

「やうですか、じゃあ私はこれで」

やう言つて私が部屋を出て行つとすると引き留められた。

「何ですか?」

「こやこや、任命にはいろいろ準備が必要なんだ。君にやらること  
が溜まつてゐる」

「そんなこと知りませんよ。そもそも、実名で任命なんてされたく  
ありません。そんなことされたら有名になっちゃうじゃないですか。  
騎士団とか宮廷魔導師なんかにはなりたくないんで賢者にはなりた  
くないです」

そもそも、任命までは聞いてない。私が聞き逃してただけかもし  
れないけど。

「最初から実名での任命など考えてない。最初からその予定だろ?」

「やうでしたつけ?」

「ああ。そもそも君が実名なら協力すらしないと言つたんだりつへ。全く、自分でそれを忘れるなどあり得んわ」

「うですか。でも、できれば姿もさらしたくないんですけどね。

「姿も見えることを検討してはいたんだがそれは無理そうだ」

「はーーー?」

「王城での仕合式の時にほんの魔導師も来る。結局はばれてしまつ可能性が高い」

「じゃあ、任命されたくないですー。」

「まあ、待て。そこに関しては王から許可をもらつてある。当面はロープを被つていいそうだ。しかも、探査魔法を効かなくする特製のロープを私が用意しよう」

「…………了解しました」

「では、偽名等を考えようか」

「うひして、賢者への任命が決まってしまった。最悪だね。

\* \* \* \* \*

任命が決定したので論文といつかレポートを書かなくてよくなつた。おかげで眞面目に授業を受けてる風に見せることも簡単になりまして金髪お嬢様にもあんまりからまれなくなつた。まあ、それでも、絡んでくるんだけどね。

それと、睡眠がとれるつてなんて素敵ことなんだろ！と思つてしまつた。あまりにも寝ない生活を続けたんで寝るのがちょっと好きになつた。

とりあえず、任命式までは完全に暇を持て余すことができる。バツ！暇！

と、考えてたんだけどな〜。

「ええ、今週から来週にかけて外でのサバイバル訓練になります。班はこじらで決めますので承知しておいてください」

なんですよ！？心が休まらないし、サバイバル訓練！？体も休まらない！

まあ、そんなこんなでサバイバル訓練です。ちなみに再来週のどこかで任命式が行われるらしいです。来週には新たな賢者が生まれたと報道もなされるらしいですね。

と、のんきに考えてたんだけど……、発表された班を見て愕然とした。

班長アリア＝スカーレット＝レヴァンティア  
副班長マリー＝ゴールド＝ジルヴェルド＝マルティクス＝グランティール

その他3名

「マコーさんって誰ですかー！」

「私ですが？」

「げつ！？」

そこにいたのは金髪のお嬢様だった。おお、神よ。あなたはどこのまで残酷なんだ……。

第04話「賢者に任命されました」（後書き）

やばい。 短い。

次回からサバイバルです。

後まともに話が進まない。 どうしましょ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4090u/>

ブレイドガンナー～転生少女の冒険譚～(仮)

2011年11月27日12時55分発行